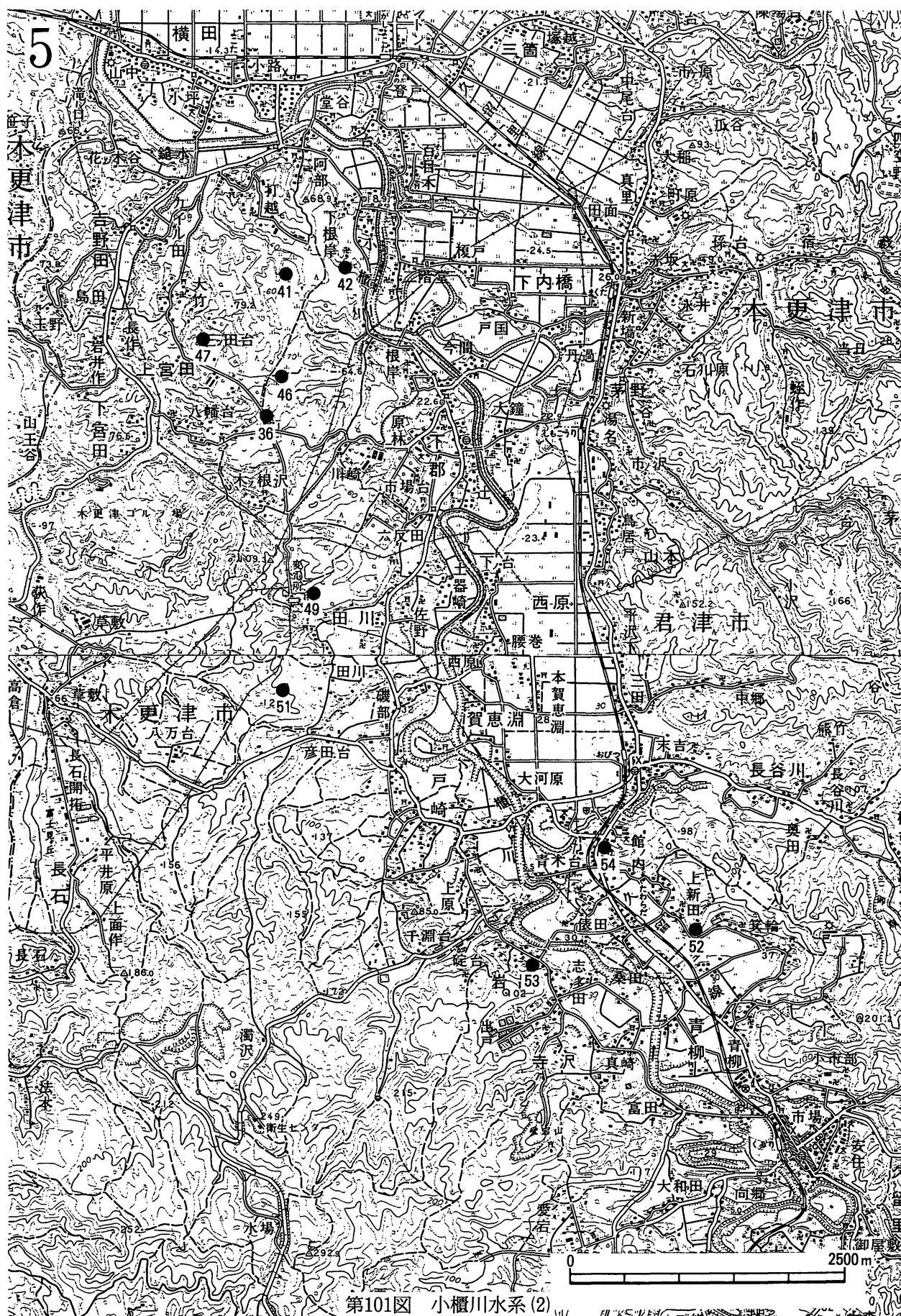


第4節 小櫃川水系

小櫃川は上、中流域における蛇行が特に顕著であり、これは浸食されやすい半固結の地層と地盤の隆起がもたらした結果とされている。このため、下流域では洪水の被害が比較的少なかったとも言われている。最下流域は養老川同様の大規模な低地を、左右に形成している。左岸はすぐ南を流れる矢那川とともに「小櫃川－矢那川低地」を形成している。前期古墳は、下流域では主に左岸に立地しており、中流域には有力な前方後円墳が存在している。



第100図 小櫃川水系(1)



35. 愛宕（あたご）4号墳（第102～104図） 弥生後期～草刈Ⅰ期（前半）併行

①所在地 袖ヶ浦市永吉字愛宕781-1ほか

②墳形 方墳

③規模 10.2m～13.4m（台状部）、12.8m～16.6m（周溝含む）

④墳丘 有り、0.2m

⑤主体部 木棺直葬1

⑥概要 小櫃川の支流である松川の左岸の標高約78mの舌状台地上に位置する方墳である。南西周溝は愛宕3号墳に、西コーナー部では愛宕8号墳に、それぞれ切られている。周溝の幅は、1.1m～1.88m、深さは0.75mを測る。主体部は、台状部の中央で検出された木棺（箱形木棺と推定される）直葬である。掘方は3.22m×2mの隅丸長方形を呈し、棺部（2m×0.75m）が明瞭に区別することができた。古墳に伴う遺物には、北西側周溝を中心として、ややまとまって出土した壺（1）～（3）、小型甕（4）、鉢（5）、（6）、高杯（7）などの土器と、主体部内の木棺部の北東コーナー部から出土した鉄剣1、主体部内覆土中から出土したガラス玉47個がある。そのほかに、調査時に粉々になった琥珀製の玉が3点ほど出土している。築造時期については、土器等の遺物の組成から、出現期の古墳と報告されている。私見では（7）の高杯は廻間Ⅰ式の初期に繋がると考えられ、装飾壺の胴部も球体であり新相を示している。型式上微妙な位置にあると考えられる。

⑦報告書 『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター 1996

36-（1）林（はやし）遺跡Ⅱ1号、6号、12号、2号（第105、106図） 弥生後期～終末期

①所在地 木更津市下郡字向高尾2241-6ほか（3号、4号も同じ）

②墳形 方形周溝墓

③規模 1号=9.6m（内径）、12.6m（外径） 6号=8m（内径）
12号=3.2m（内径）、2号=8.6m、11.2m

④墳丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概要 路線用地の部分的な遺構調査であるが、いずれも内径が10m前後の遺構群である。弥生後期（終末期）とすれば方形周溝墓、草刈Ⅰ期に比定されれば方墳と呼称される。1号は出土土器が無く不明であるが6、12号は出土土器からいずれも弥生時代後期から終末期の範疇と考えられる。時期的には中央主体部が存在するケースが多いが、いずれの遺構からも確認できない。

⑦報告書 『林遺跡Ⅱ』 財団法人君津郡市文化財センター 1994
（3号、4号も同じ）

36-（2）林遺跡Ⅱ3号、4号（第106図） 草刈Ⅰ期併行

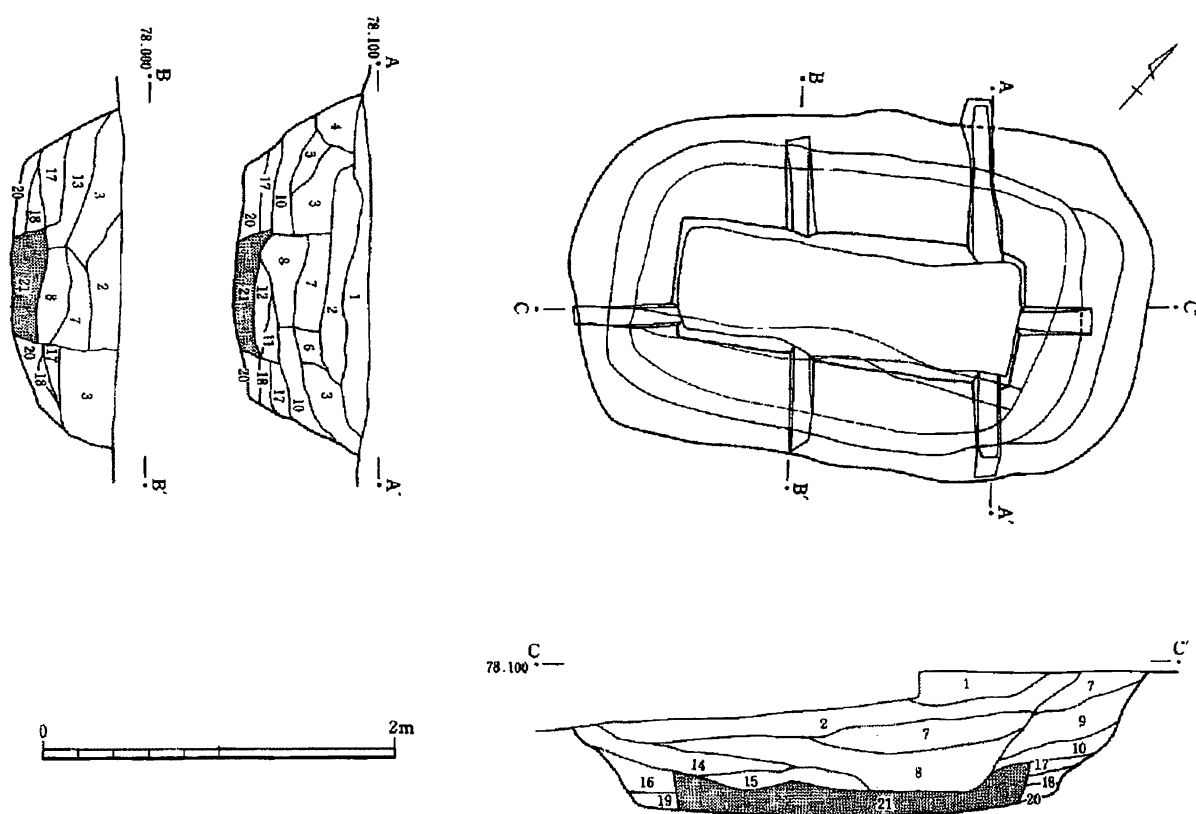
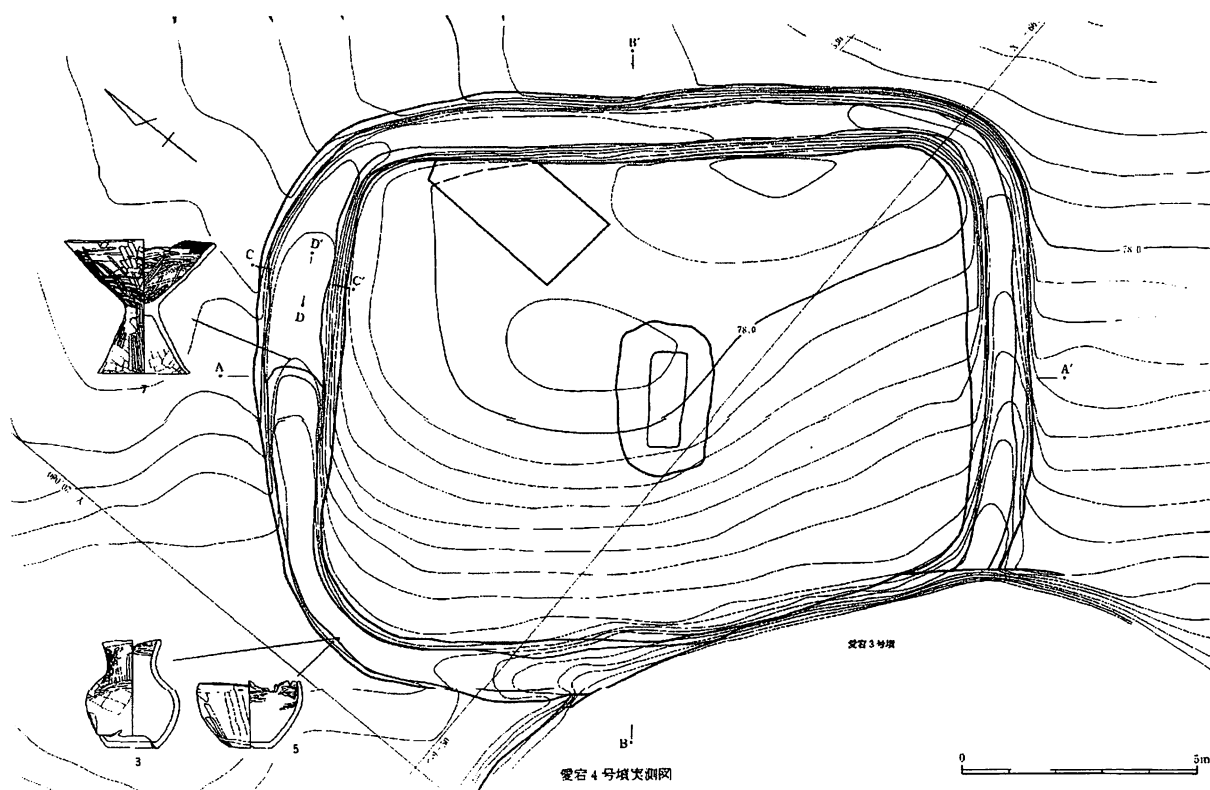
②墳形 方墳（報告ではいずれも方形周溝墓）

③規模 3号=不明 4号=北東から南西9.7m、北西から南東8.3m（内径）

④墳丘 無し

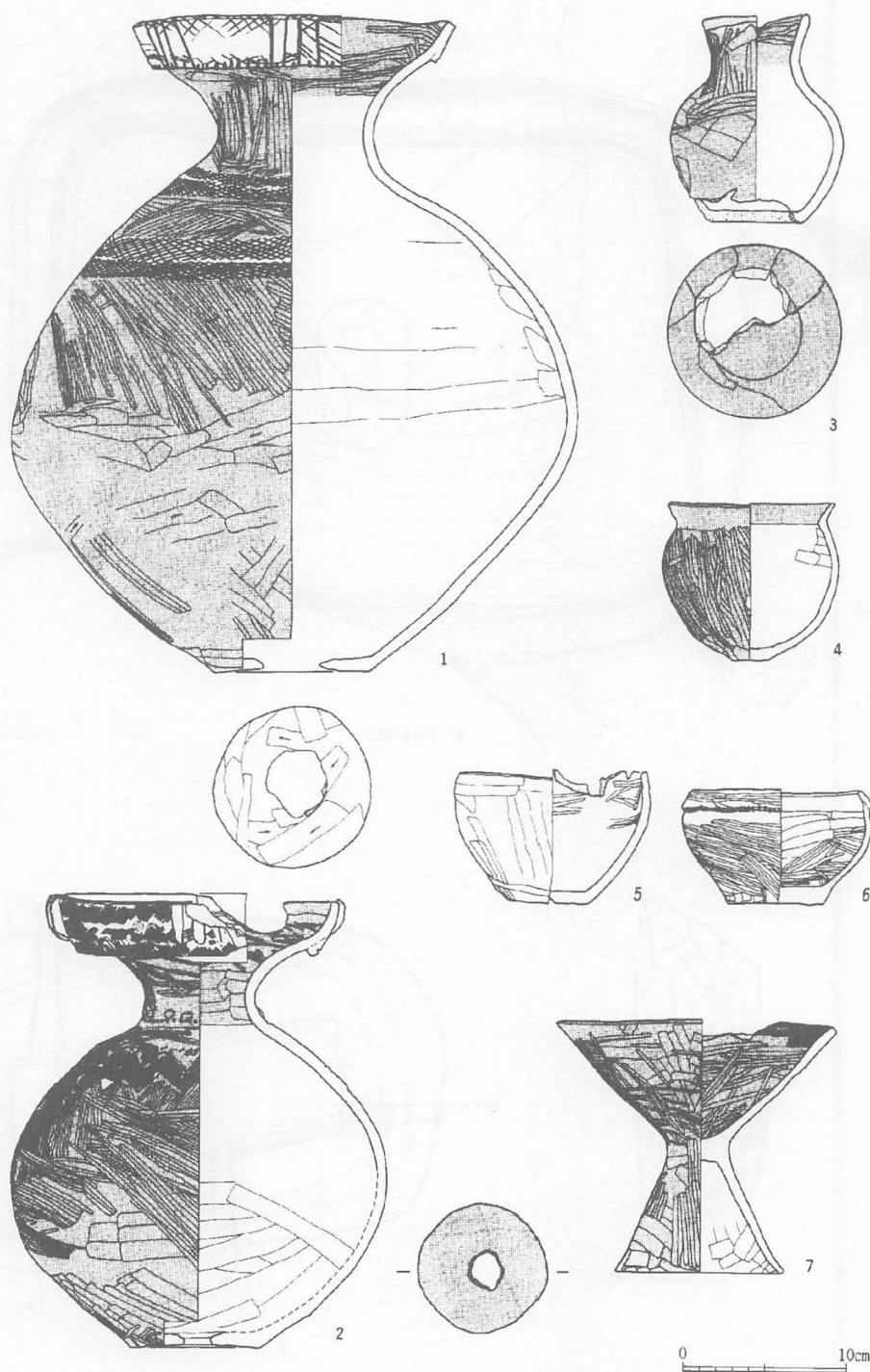
⑤主体部 不明

⑥概要 3号と4号のみ古墳時代前期に比定しているが、無文の単口縁壺や埴の型式観から判断されたものであろう。いずれも底部が焼成後に大きく穿孔（破碎）されている。



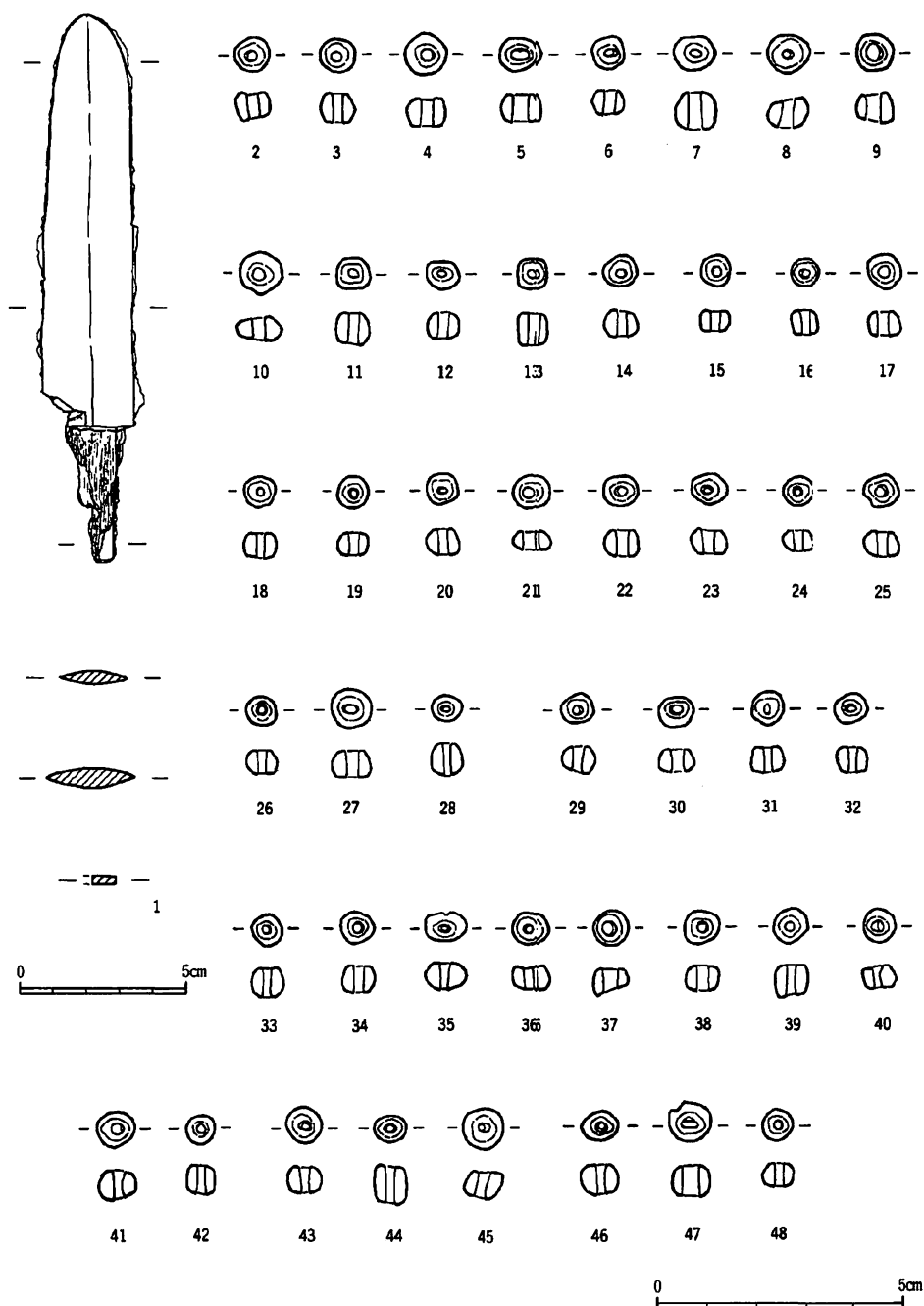
愛宕4号墳埋葬施設実測図

第102図 愛宕4号墳平面図，主体部図



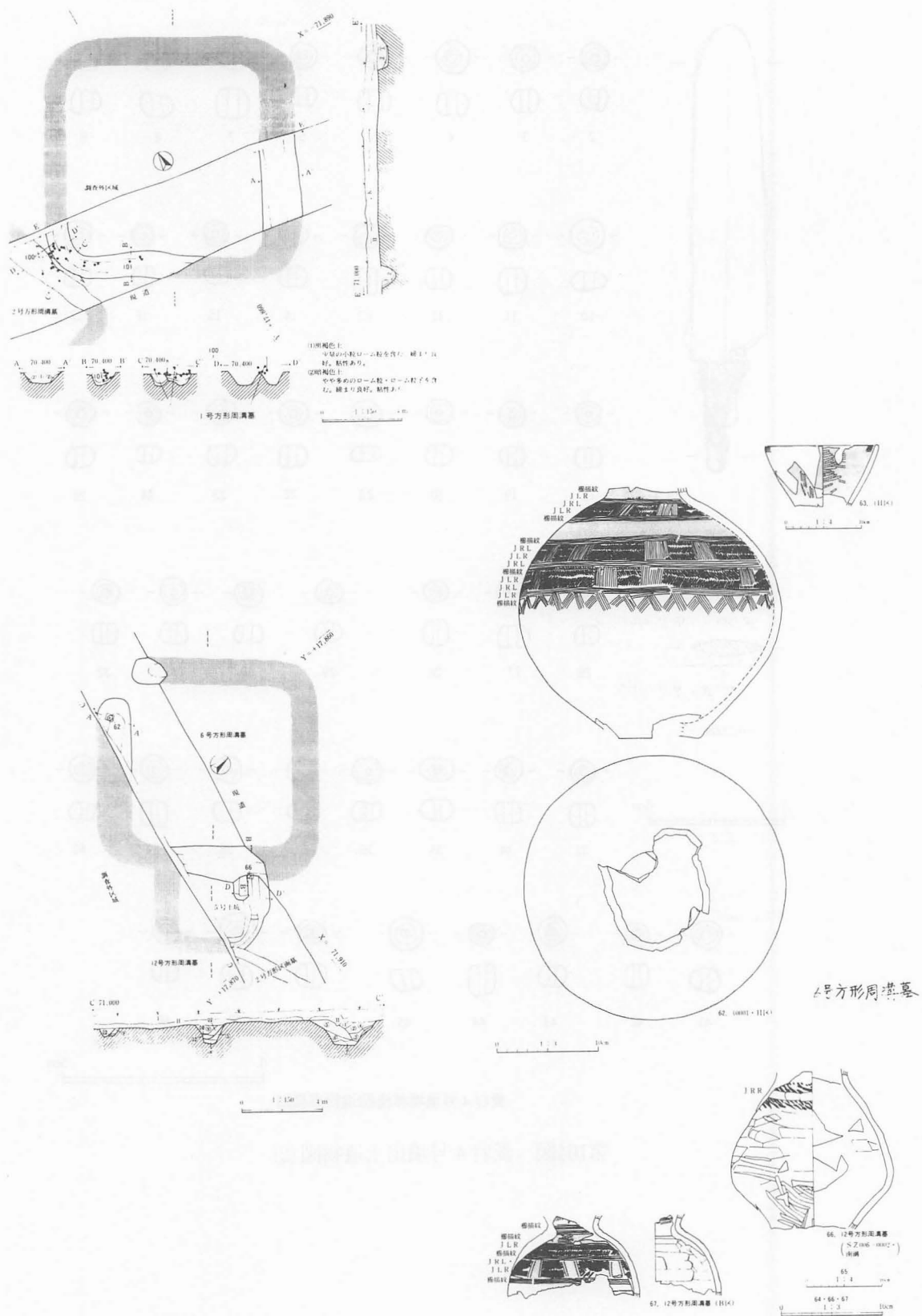
愛宕4号墳遺物実測図

第103図 愛宕4号墳出土遺物図(1)

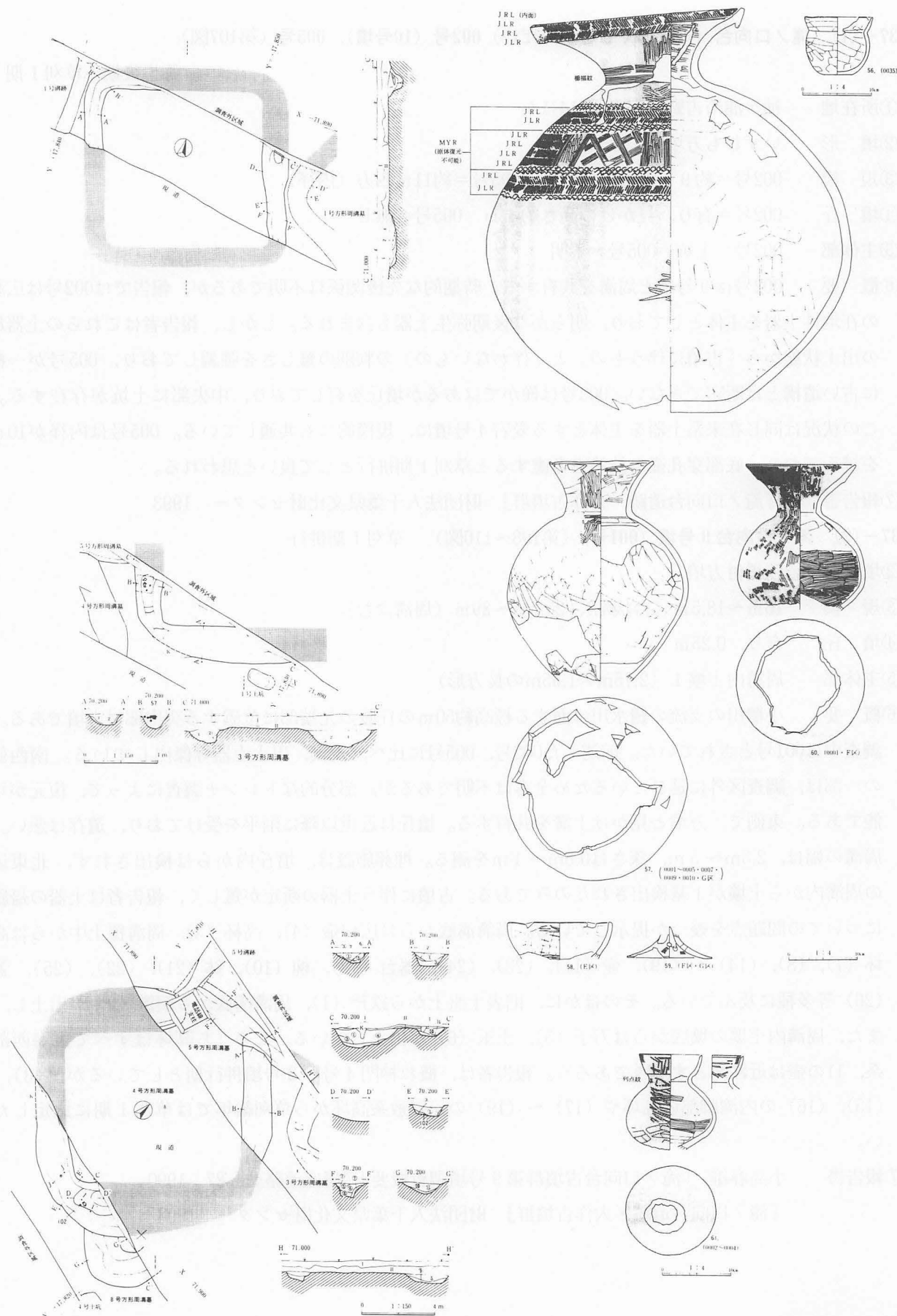


愛宕4号墳埋葬施設遺物実測図

第104図 愛宕4号墳出土遺物図(2)



第105図 林Ⅱ 1号, 6号, 12号平・断面図, 出土遺物図



第106図 林Ⅱ 2号～4号平・断面図，出土遺物図

37-(1) 滝ノ口向台（たきのくちむかいだい）002号（10号墳）、005号（第107図）

弥生後期～草刈Ⅰ期

- ①所在地 袖ヶ浦市吉野田字寺原514ほか
- ②墳 形 いずれも方墳
- ③規 模 002号＝約9m四方（内径） 005号＝約11m四方（内径）
- ④墳 丘 002号＝有り、見かけの高さ約1m 005号＝無し
- ⑤主体部 002号＝土坑 005号＝不明
- ⑥概 要 002号は9号墳と周溝を共有する。時期的な先後関係は不明であるが、報告では002号は広義の在地性土器を主体としており、明らかな後期弥生土器も含まれる。しかし、報告者はこれらの土器群の出土状態から「古墳に伴うもの」と「伴わないもの」の判別の難しさを強調しており、005号が一概に古い遺構とは断定できない。002号は僅かではあるが墳丘を有しており、中央部に土坑が存在する。この状況は同じ在来系土器を主体とする愛宕4号墳に、規模的にも共通している。005号は内径が10mを越えており、底部穿孔壺の技法を考慮すると草刈Ⅰ期併行として良いと思われる。

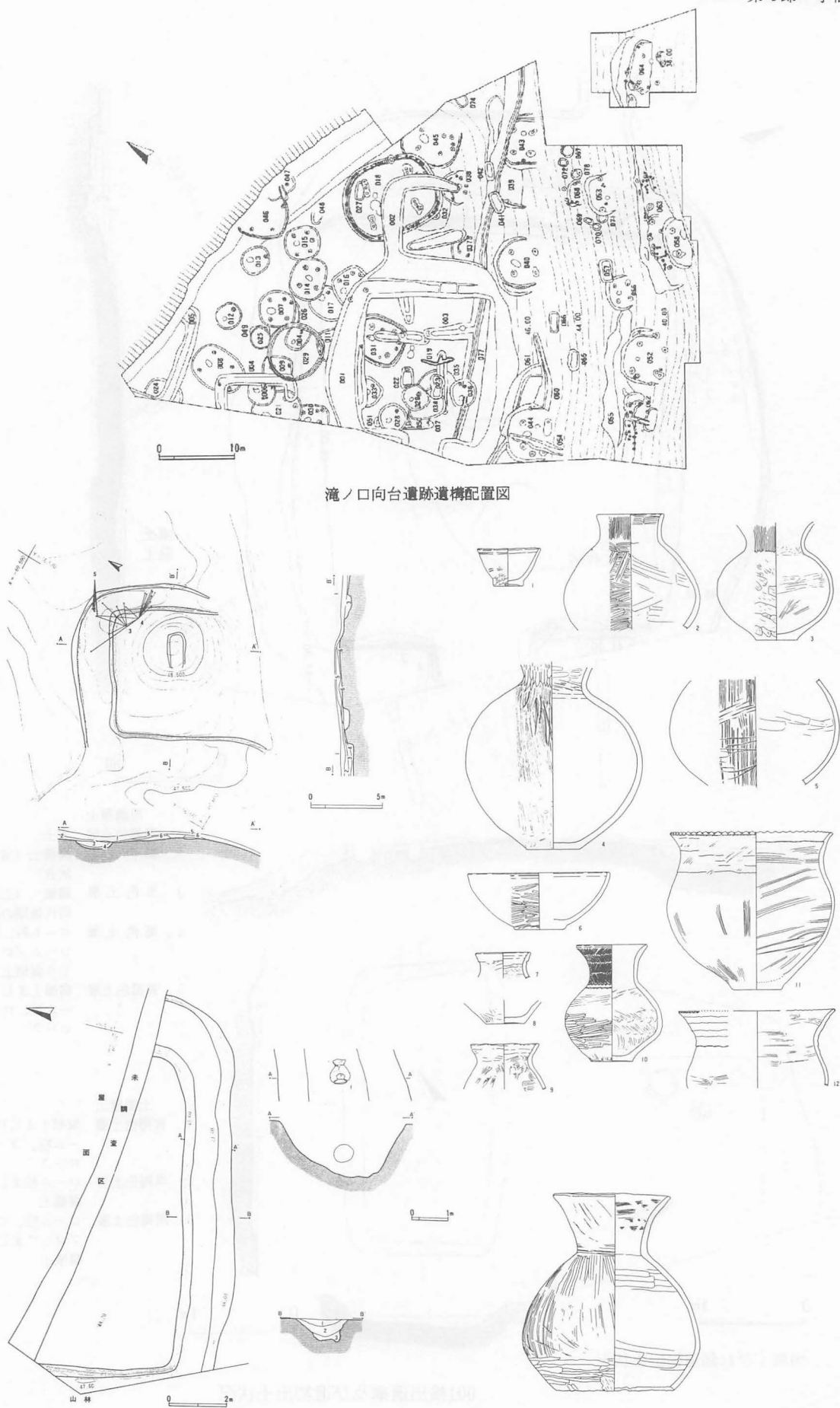
⑦報告書 『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』 財団法人千葉県文化財センター 1993

37-(2) 滝ノ口向台9号墳（001号）（第108～110図） 草刈Ⅰ期併行

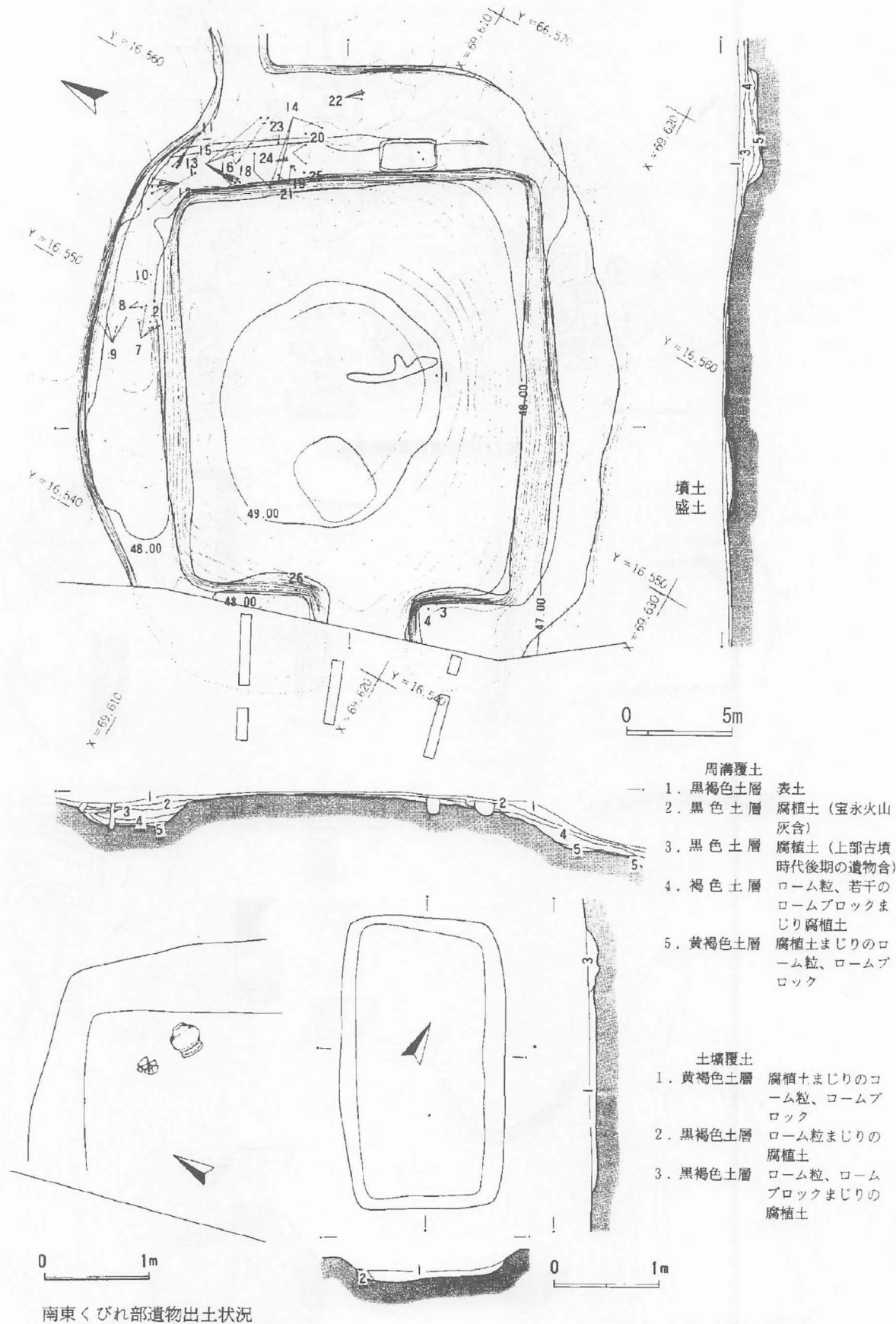
- ②墳 形 陸橋付方墳
- ③規 模 16m～18.5m（台状部）、25.5m～29m（周溝含む）
- ④墳 丘 有り、0.25m
- ⑤主体部 周溝内土壇1（2.75m×1.55mの長方形）
- ⑥概 要 小櫃川の支流の鏈水川に面する標高約50mの丘陵の先端部に位置する突出部付方墳である。調査中は001号とされていた。前述した002号、005号に比べ、規模、出土土器等傑出している。南西側の一部は、調査区外に延びているため全容は不明であるが、部分的なトレンチ調査によって、復元が可能である。東側で、方墳と見かけ上溝を共有する。墳丘は近世以降に削平を受けており、遺存は悪い。周溝の幅は、2.5m～5m、深さは0.8m～1mを測る。埋葬施設は、墳丘内からは検出されず、北東辺の周溝内から土壇が1基検出されたのみである。古墳に伴う土器の断定が難しく、報告者は土器の帰属についての問題点を幾つか提示している。周溝溝底からは広口壺（4）、高杯（3）、周溝覆土中からは高坏（7）、（8）、（14）～（19）、壺（11）、（23）、（24）、器台（12）、椀（10）、鉢（21）、（22）、（25）、蓋（26）等多種に及んでいる。そのほかに、旧表土直上から鉄斧（1）、周溝溝底から銅鏃（2）が出土し、また、周溝内土壇の墳底からは刀子（5）、土玉（6）が出土している。このうち高坏はすべて東海西部系、11の壺は近江系とすべきであろう。報告者は、概ね神門4号～3号墳併行期としているが、（3）、（15）、（16）の内湾脚部の高坏や（17）～（19）の元屋敷系高坏から草刈編年では草刈Ⅰ期に比定したい。

⑦報告書 小高春雄 「滝ノ口向台古墳群第9号墳調査概要」『研究連絡誌』27 1990

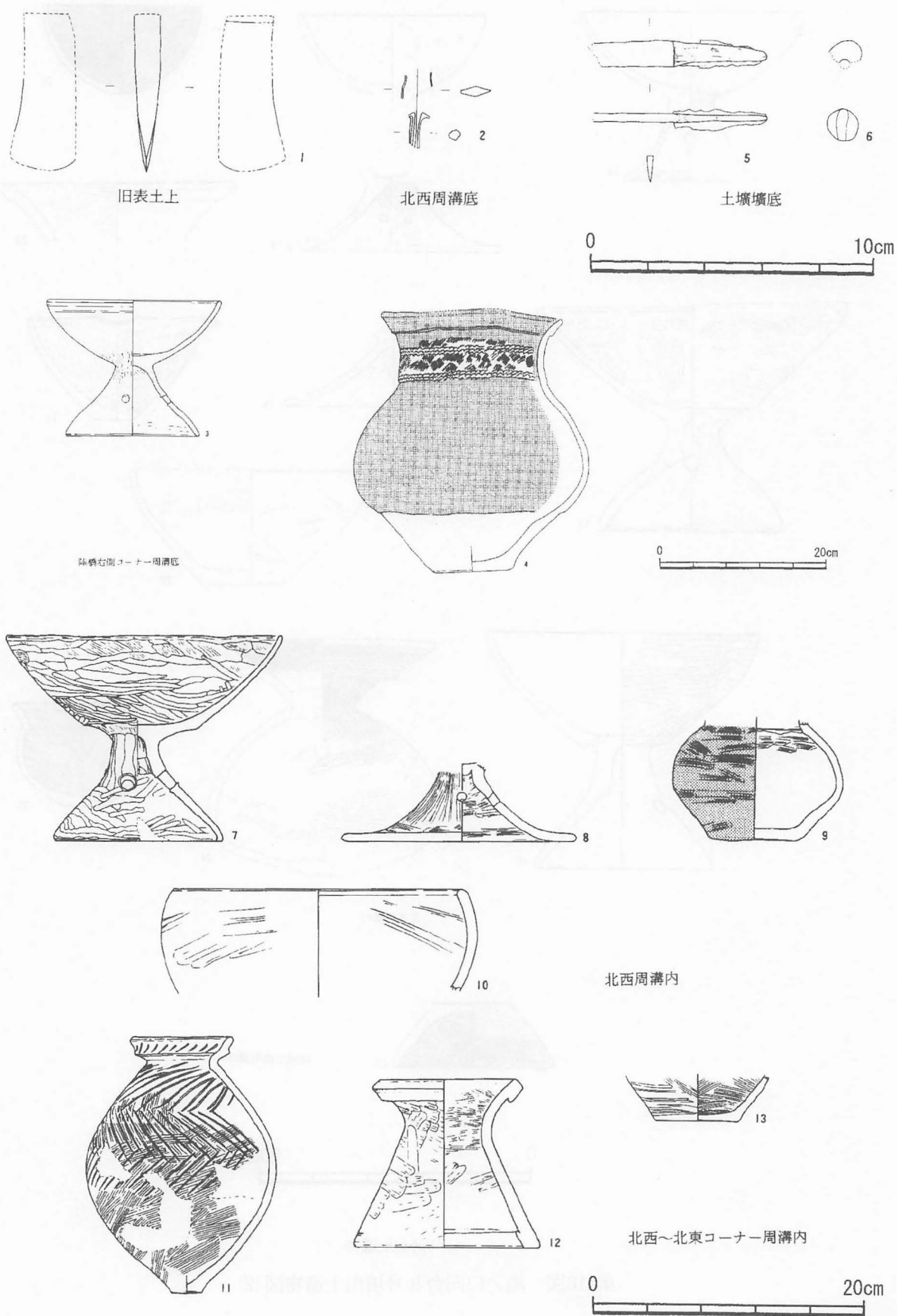
『滝ノ口向台遺跡・大作古墳群』 財団法人千葉県文化財センター 1993



第107図 滝ノ口向台遺構配置図(上), 002号, 005号平・断面図, 出土遺物図(下)

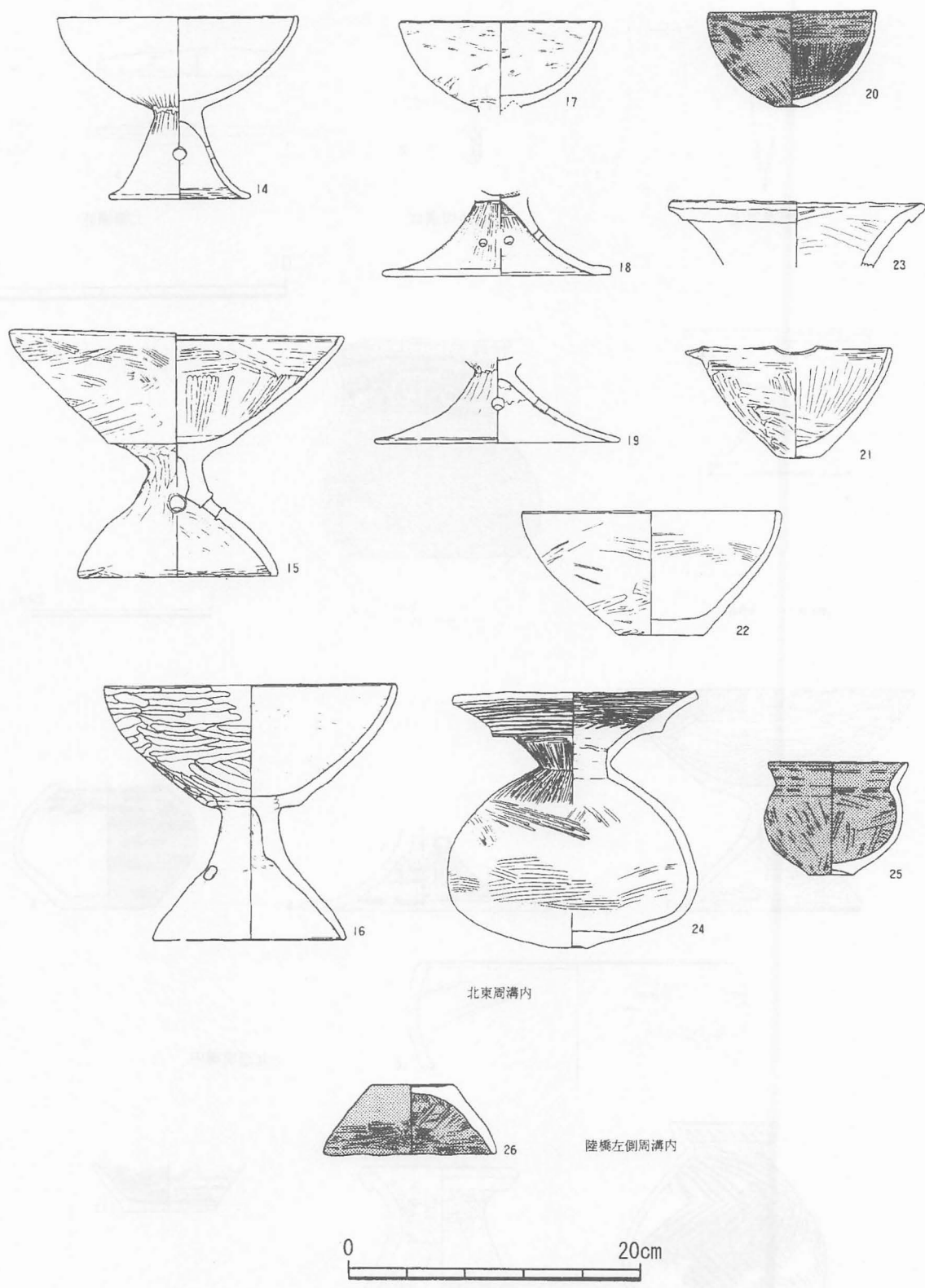


第108図 滝ノ口向台9号墳平・断面図, 主体部図



001出土遺物

第109図 滝ノ口向台9号墳出土遺物図(1)



北東周溝内

陸橋左側周溝内

001出土遺物

第110図 滝ノ口向台9号墳出土遺物図(2)

38. 椿（つばき）3号墳（第111・112図） 草刈Ⅱ期（前半）併行

①所在地 袖ヶ浦市大鳥居字起越894-1 ほか

②墳形 方墳

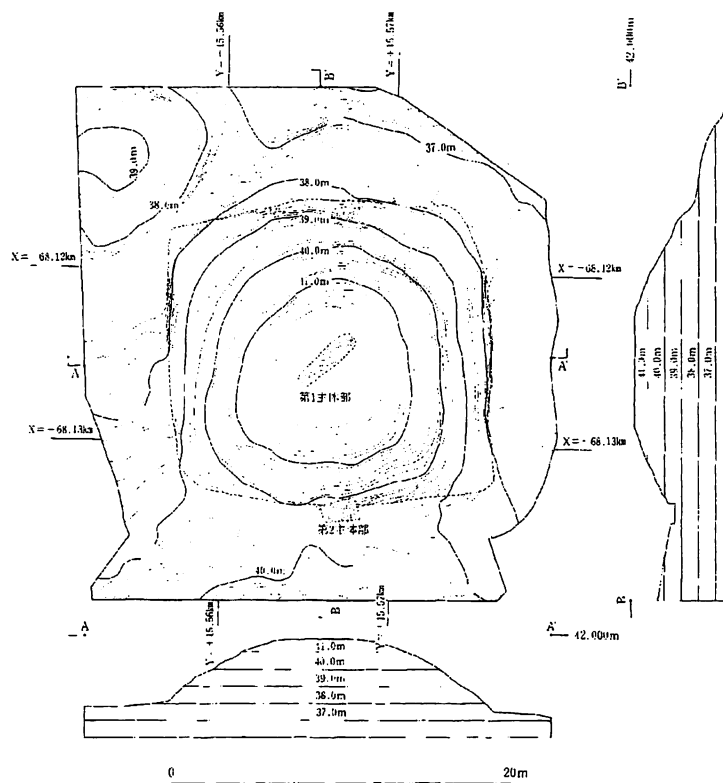
③規模 18m～19m

④墳丘 有り、4m（盛土1.2m）

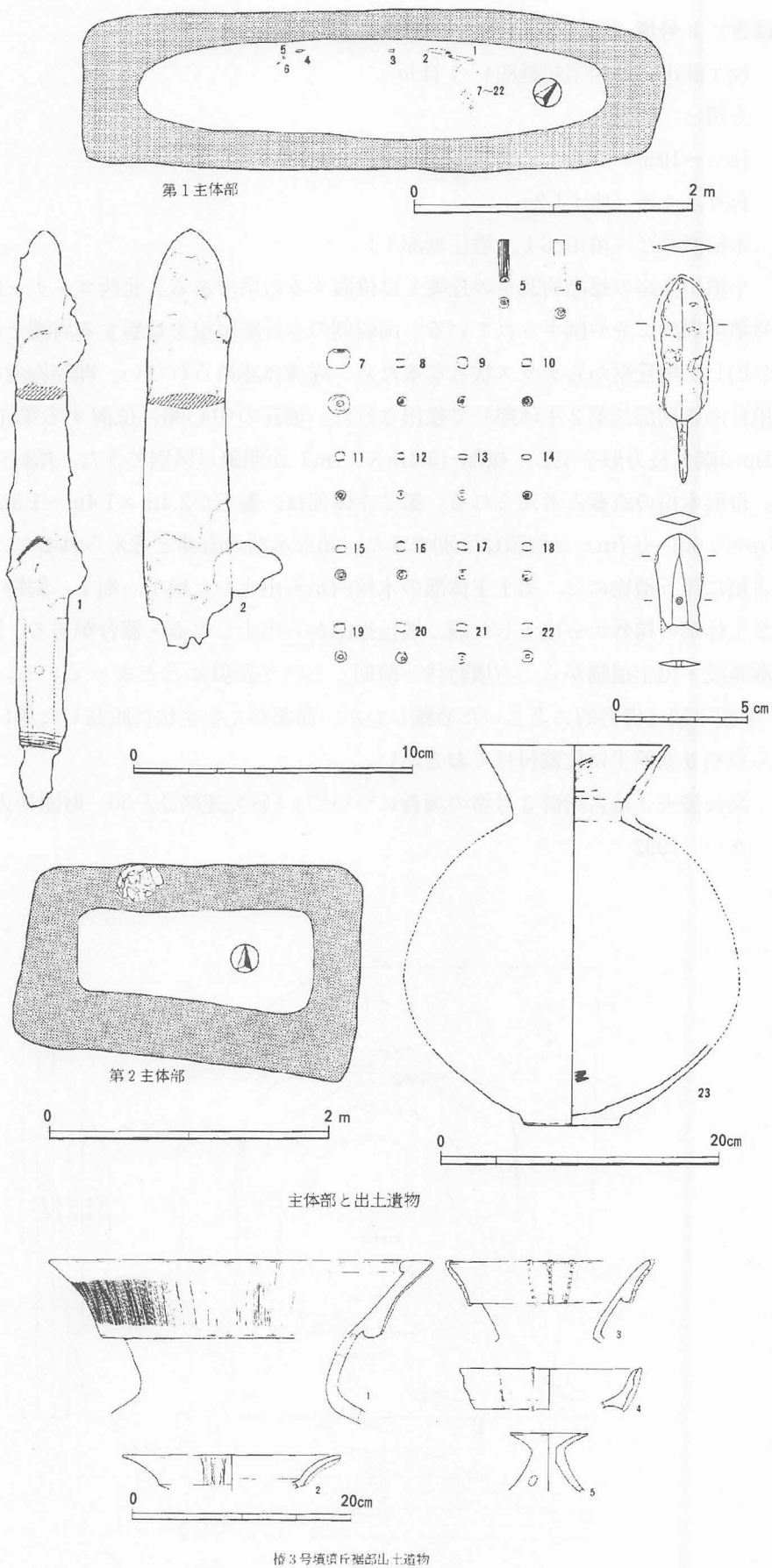
⑤主体部 木棺直葬2（墳頂部1，墳丘裾部1）

⑥概要 小櫃川南岸の標高約38mの丘陵上に位置する方墳である。北西コーナー部分を、後期の円墳である2号墳の周溝にやや削平されている。南辺側のみ丘陵尾根を切断する周溝となるが、他の3辺は、斜面を削り出し、墳丘裾からテラス状となるため、周溝は認められない。埋葬施設は、墳頂部（第1主体部）と墳丘南側裾部（第2主体部）で検出された。墳丘の中心部に位置する第1主体部は、掘方が4.2m×1.1mの隅丸長方形を呈し、棺部（3.4m×0.7m）が明瞭に区別できた。棺底の断面は緩いU字形を呈する。舟形木棺の直葬と考えられる。第2主体部は、掘方が2.4m×1.4m～1.5mの長方形を呈し、棺部（1.7m×0.6m～0.7m）が明瞭に区別できた。箱形木棺の直葬と考えられるが、詳細な構造は不明である。古墳に伴う遺物には、第1主体部の木棺内から出土した槍1，剣1，銅鏃2，管玉2，ガラス玉17，第2主体部の棺外から出土した壺，墳丘裾部から出土した壺・器台がある。築造時期については、墳形・埋葬施設・出土遺物から、古墳時代「前期」という表現にとどまっている。房総地方における「大郭式」の編年観は資料的に乏しいため難しいが、頸部がくの字状に屈曲した単口縁壺と小形器台の組合せから草刈Ⅱ期前半に位置付けておきたい。

⑦報告書 高梨俊夫「椿古墳群3号墳の調査について」『研究連絡誌』36 財団法人千葉県文化財センター 1992



第111図 椿3号墳墳丘測量図



第112図 樟3号墳主体部図, 出土遺物図

39. 寒沢（さぶざわ）12号墳（第113図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市永吉字寒沢773-1

②墳形 方墳

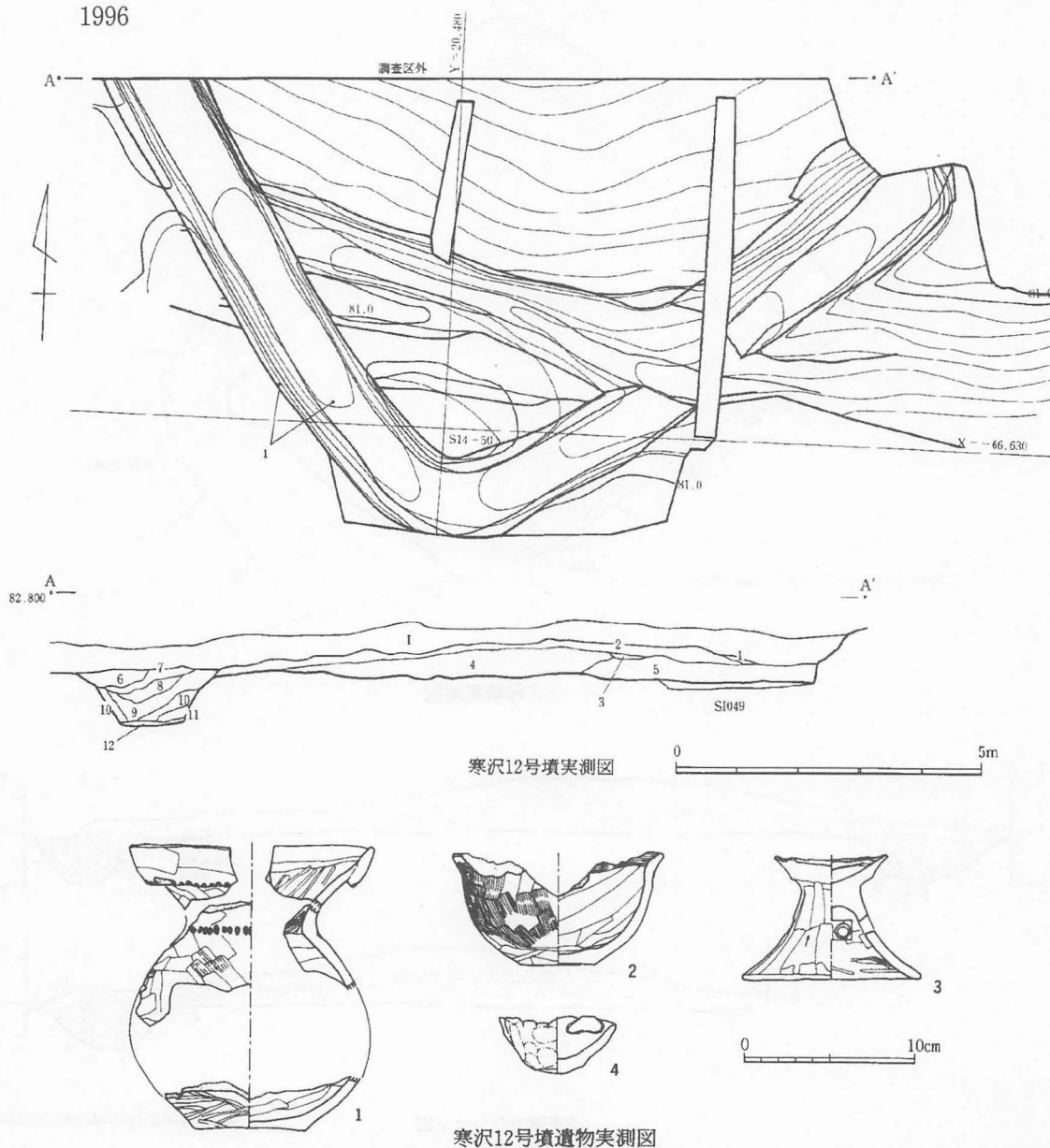
③規模 8.5m（台状部），10.8m（周溝含む），墳丘高0.55m

④墳丘 有り，0.55m

⑤主体部 不明

⑥概要 小櫃川の支流の松川左岸の標高約80mの舌状台地上に位置する方墳である。北側2分の1は調査区外へ延びているため、全容は不明であるが、検出部分から上記の規模に復元できる。周溝の幅は1.25m～1.45m，深さは0.8mを測る。埋葬施設は検出されなかった。古墳に伴う遺物には、南西コーナー部及び西側周溝覆土から出土した壺・鉢・小形器台・手づくね土器がある。資料的に乏しいが、草刈Ⅱ期の範疇には入るであろう。

⑦報告書 『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター
1996



第113図 寒沢12号墳平・断面図，出土遺物図

40. 清水井（しみずい）2号墳（第114・115図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市高谷字清水井1511-2ほか

②墳形 方墳

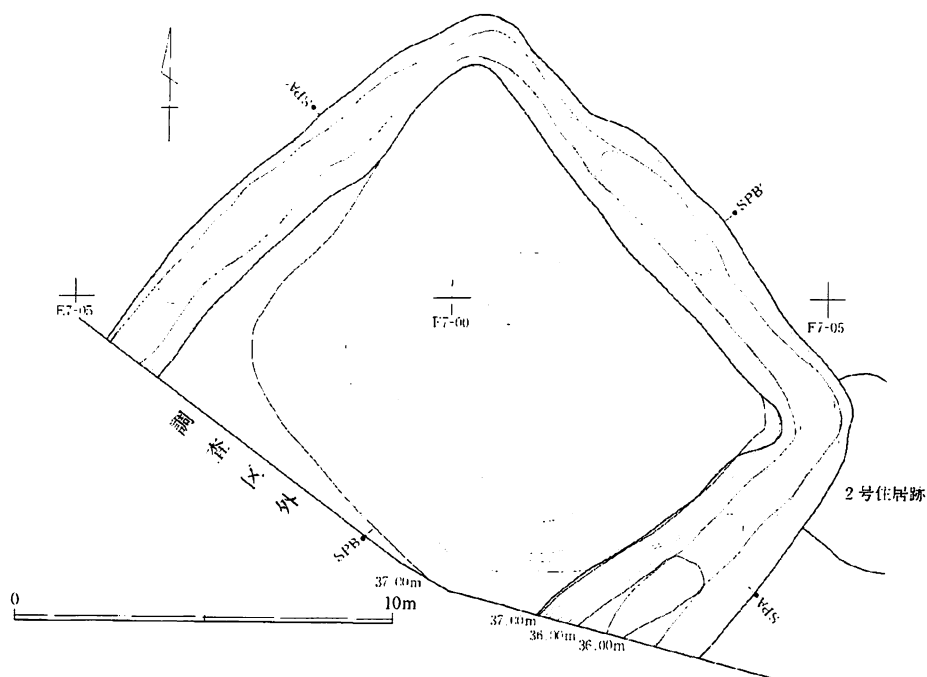
③規模 12.2m（台状部），17.1m（周溝含む）

④墳丘 有り，0.6m

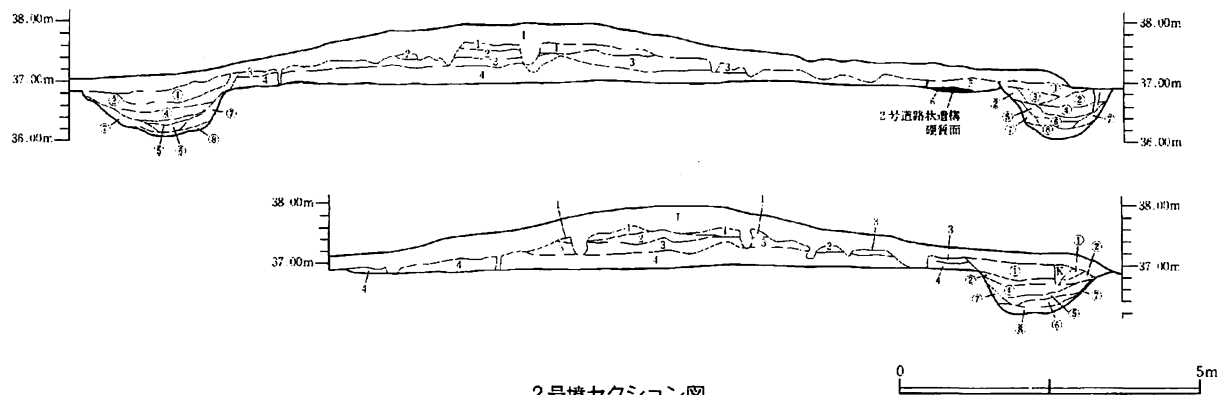
⑤主体部 不明

⑥概要 小櫃川の中流域北岸の標高約37mの舌状台地上に位置する方墳である。墓地が存在する南西側は調査することができなかったため、全容は不明である。さらに、攪乱が著しく、墳丘の遺存は悪い。周溝の幅は、2.1m～3m、深さは0.8m～0.95mを測る。主体部は、検出されなかった。古墳に伴う遺物には、周溝内覆土から出土した壺、小形甕、小形器台がある。4の鉢が定形化した小形埴に代わるものとして小形器台のセットであるならば、草刈Ⅱ期でも前半に比定されよう。

⑦報告書 『清水井遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター 1993

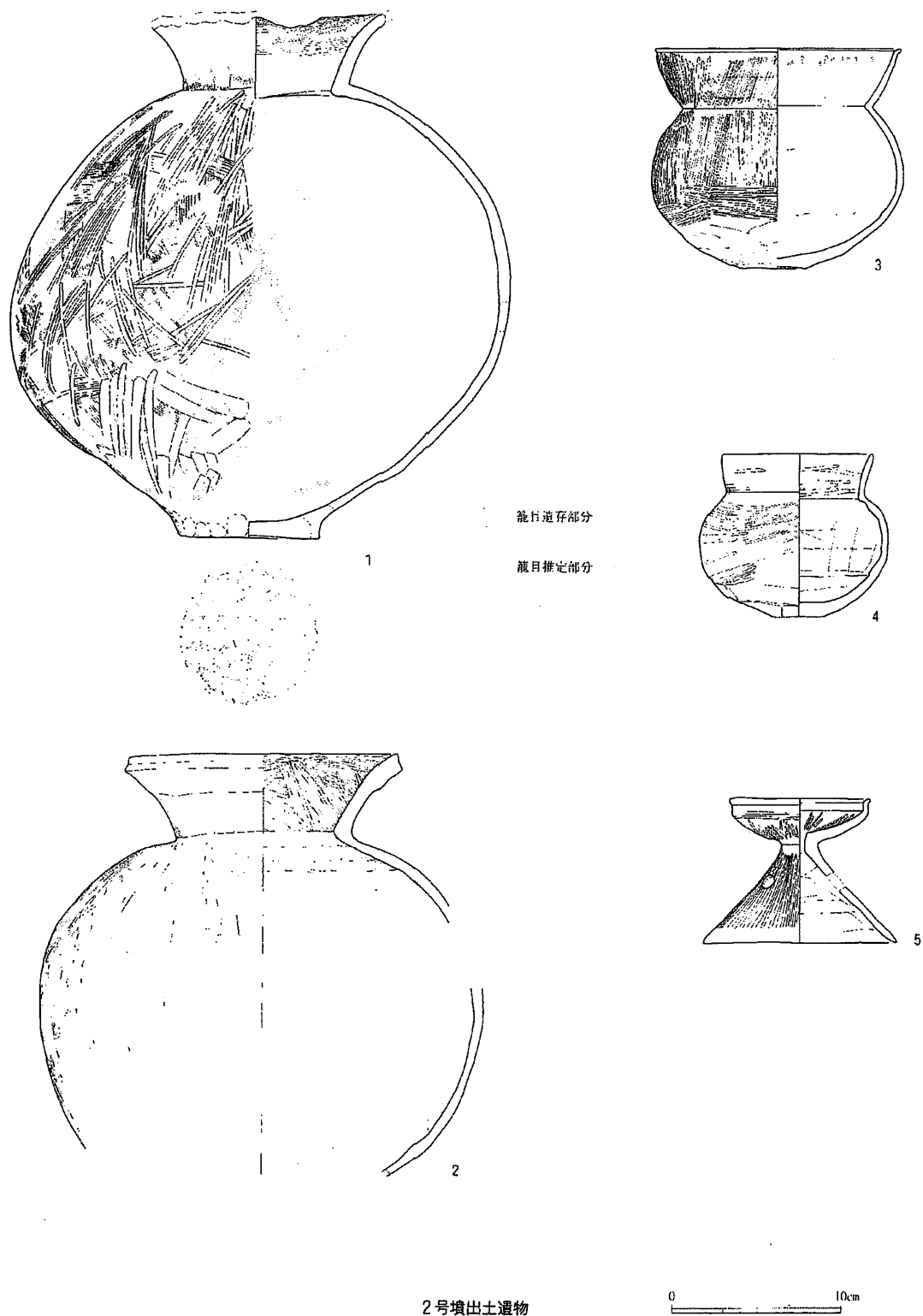


2号墳実測図



2号墳セクション図

第114図 清水井 2号墳平・断面図



第115図 清水井2号墳出土遺物図

41-(1) 二又堀（ふたまたぼり）1号墳（第116～118図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市大竹字上又堀213-1ほか

②墳形 方墳

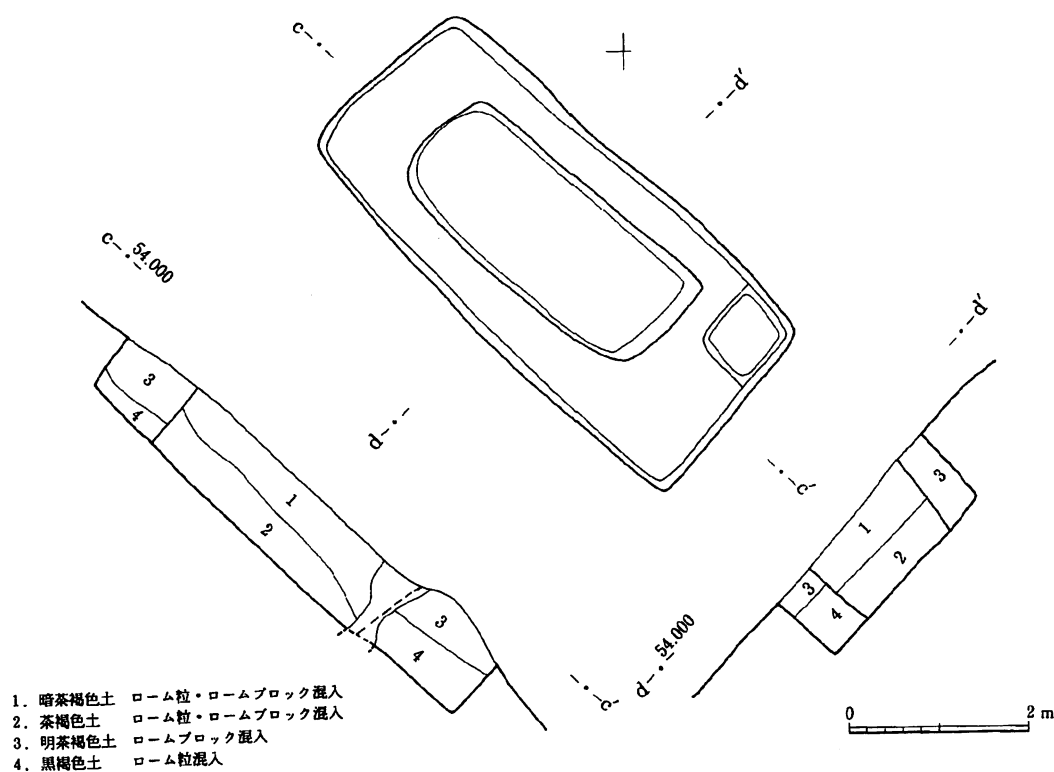
③規模 一辺9.5m～11m（台状部），15.5m（周溝含む）

④墳丘 有り，1m

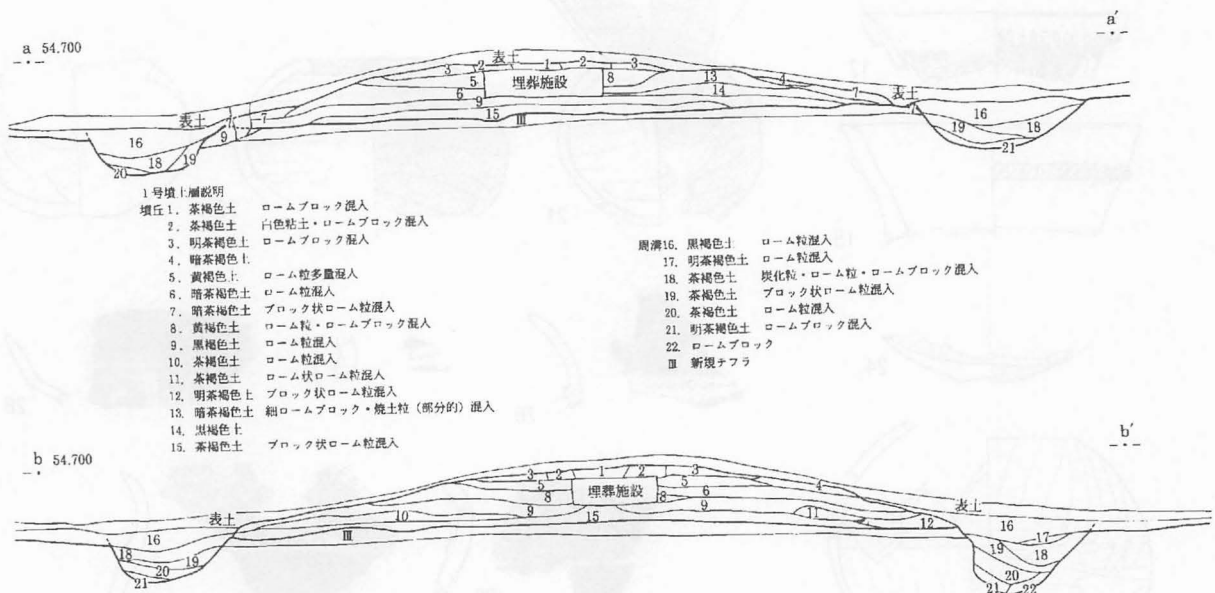
⑤主体部 木棺直葬1

⑥概要 小櫃川の中流域左岸の標高約55mの舌状台地上に位置する方墳である。二又堀遺跡は1号墳を含め8基の方墳と1基の方形周溝墓が存在する。報告者は8-7-6-4-2-3-5-1号墳の順で新旧関係を示唆しており、本墳が最新である。墳丘の遺存状態は良好である。周溝の幅は、1.5m～3m、深さは0.5m～1mを測る。周溝は、各コーナー部が幅狭で浅くなり、各辺中央部が幅広で深くなる。主体部は、墳丘のほぼ中央部で検出された土塊1基である。1.25m×2.7mの長方形を呈し、棺部と掘方が明瞭に区別でき、木棺直葬と考えられる。古墳に伴う遺物には、周溝覆土から出土した壺・甕・器台・高杯・鉢などの土器があるが、覆土一括品には混入品もあると思われる。遺存度や出土位置等考え、(1)，(2)，(10)，(15)の編年観からすれば草刈Ⅱ期（前半）に比定される。

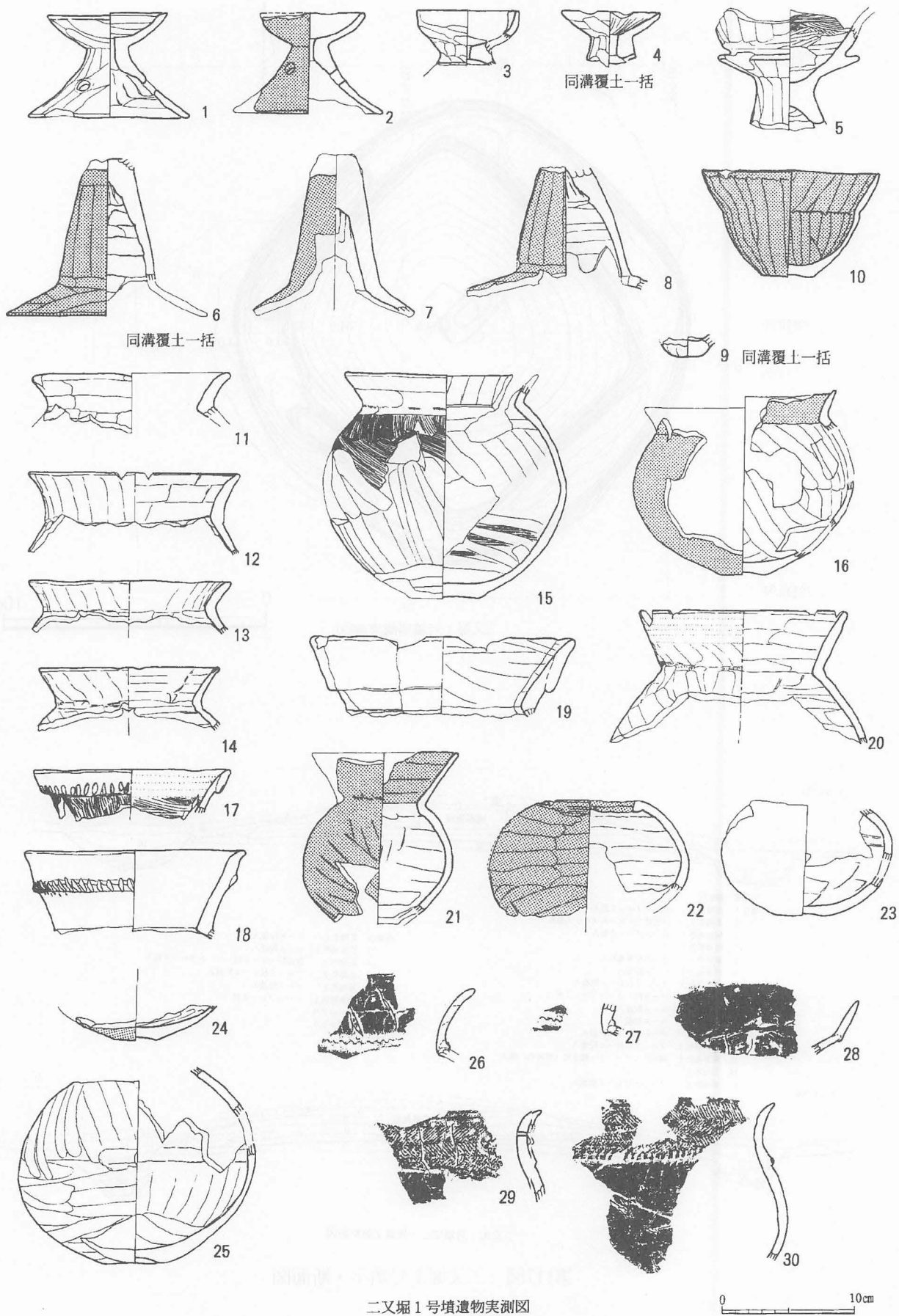
⑦報告書 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 財団法人君津郡市文化財センター 1993



第116図 二又堀1号墳主体部図



第117図 二又堀1号墳平・断面図



二又堀 1 号墳遺物実測図

第118図 二又堀 1 号墳出土遺物図

41-(2) 二又堀SK009号(第119図) 草刈Ⅱ期併行

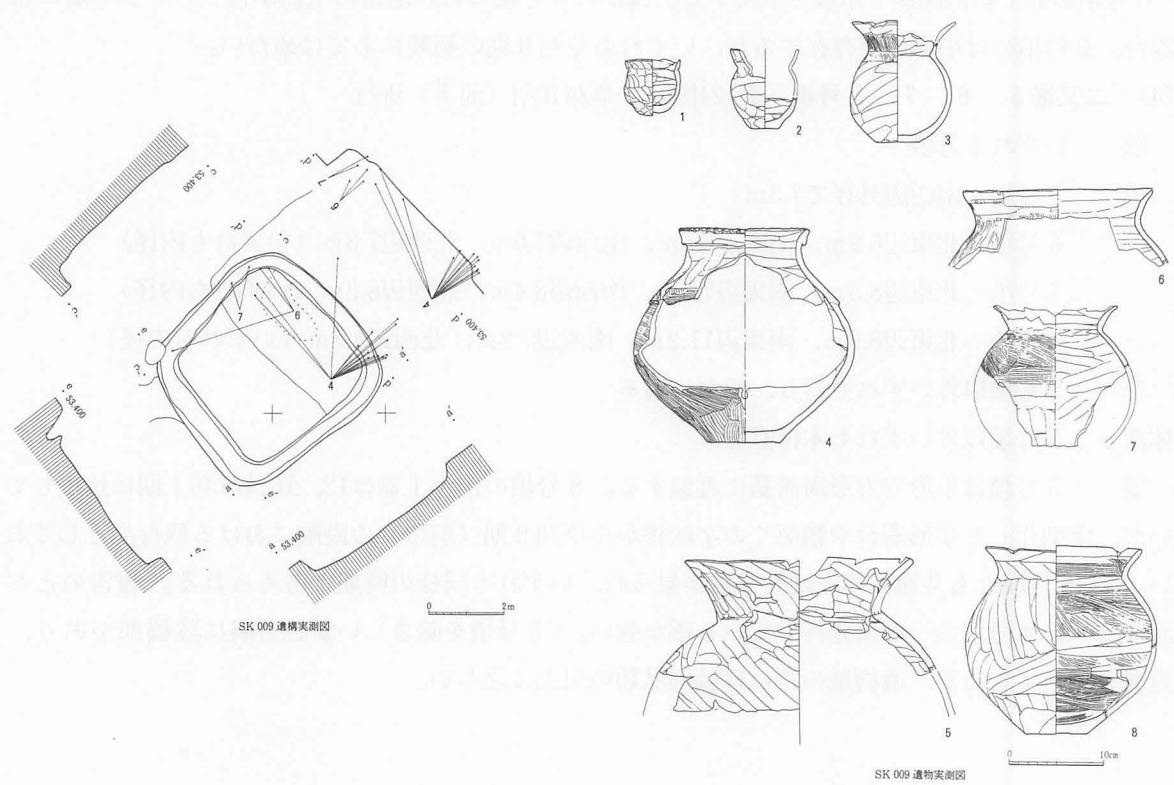
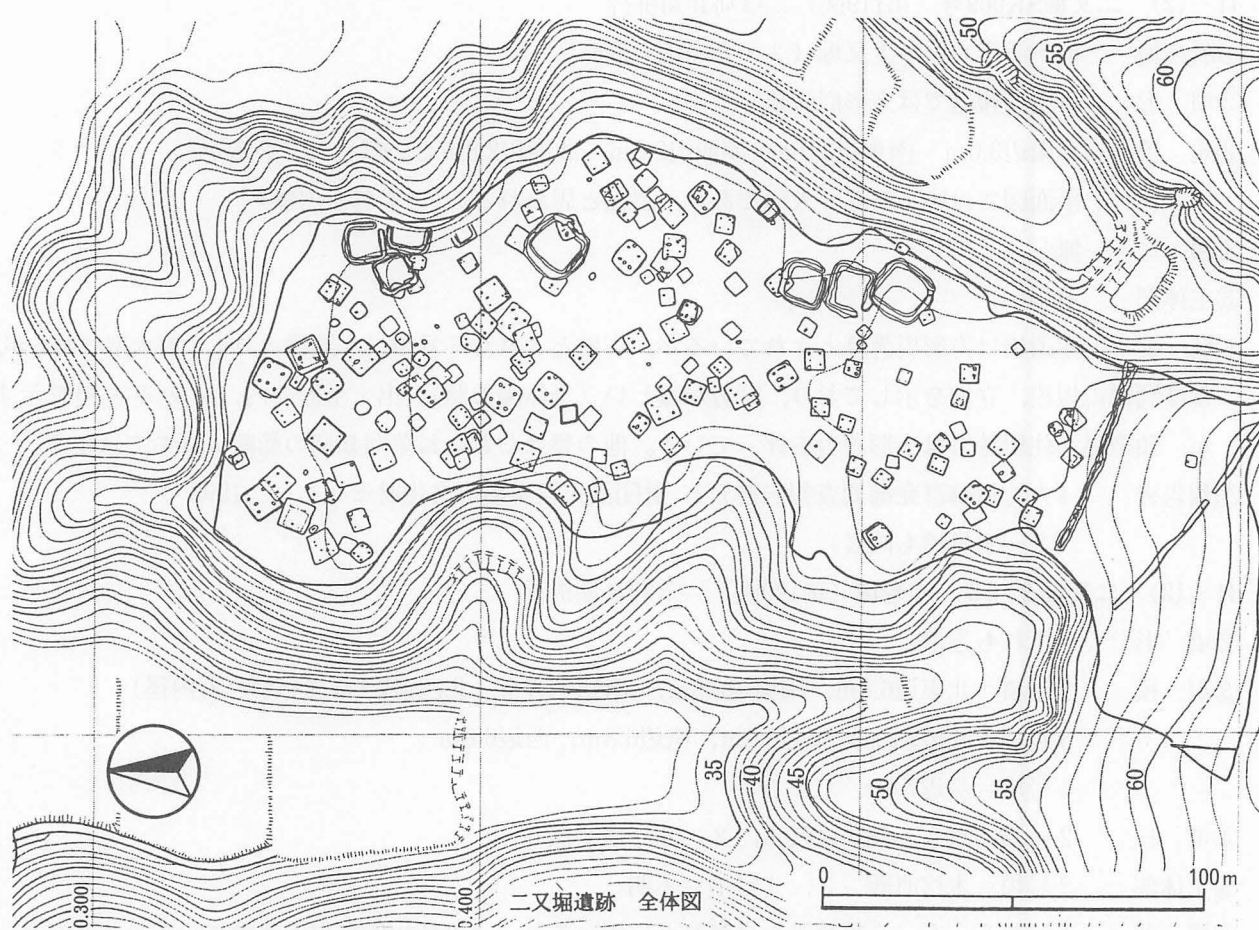
- ①所在地 袖ヶ浦市大竹字上又堀(2～8号墳も同じ)
- ②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)
- ③規模 北東辺3.0m 南東辺3.0m 南西辺2.8m 北西辺2.8mと記載されているが
平面図では約1mずつ大形であり、誤植と思われる。(いずれも内径)
- ④墳丘 無し
- ⑤主体部 不明
- ⑥概要 本遺構は方形周溝墓とされているが、古墳とされた5号墳は本遺構よりもやや大型であるが、
ほぼ同様の規模、立地を示しており、区分が難しい(全体図参照)。出土土器の内、4のみ古相を示す
が、類型品が住居跡では小形器台を伴っている。他の甕はおおむね草刈Ⅱ期の範疇にはあてはまる。
- ⑦報告書 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ』 財団法人君津郡市文化財センター 1993
(2～8号墳も同じ)

41-(3) 二又堀2, 3, 4号墳(第120図) 草刈Ⅱ期併行

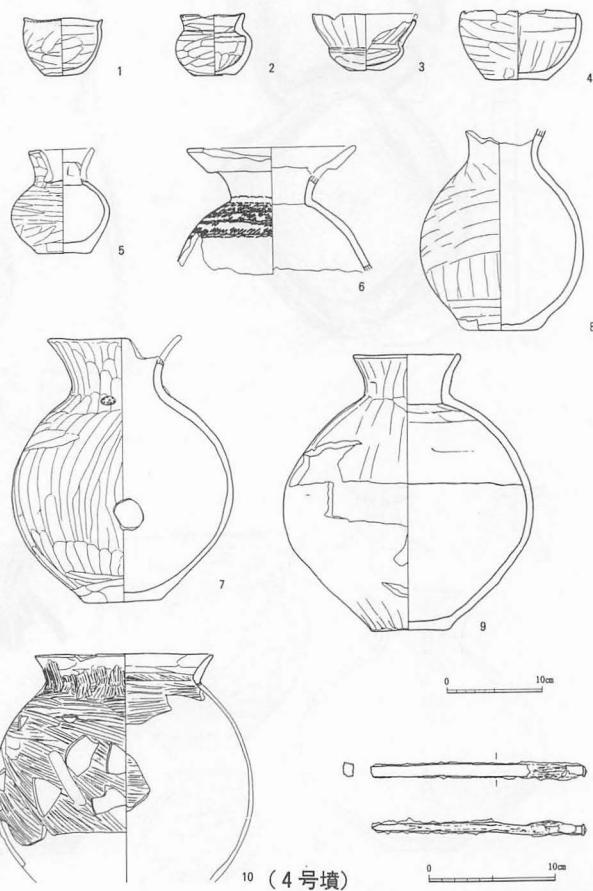
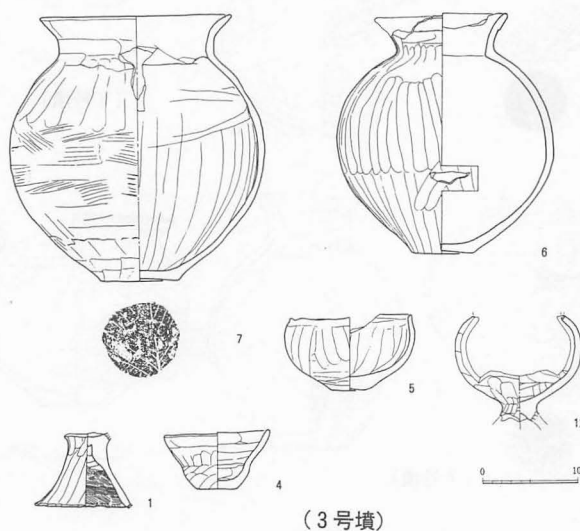
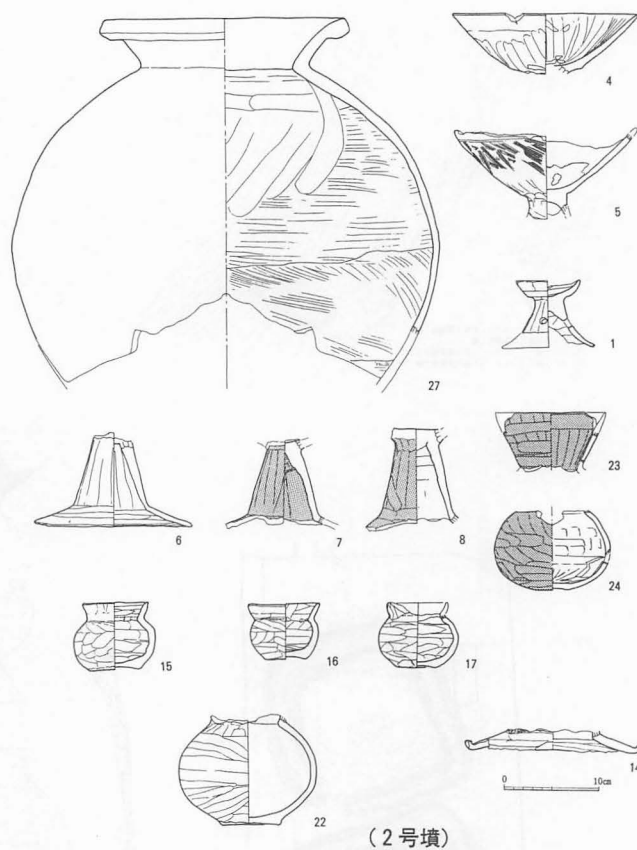
- ②墳形 いずれも方墳
- ③規模 2号墳=北東辺6.8m, 南東辺6.3m, 南西辺7.1m, 北西辺7.1m(いずれも内径)
3号墳=北辺7.2m, 東辺6.0m, 南辺6.8m, 西辺6.8m
4号墳=西辺7.4m
- ④墳丘 2号墳=有り, 僅かに残る, 3, 4号墳=無し
- ⑤主体部 2号墳=木棺直葬 3, 4号墳=不明
- ⑥概要 下記の5, 6, 7号墳とかけ離れた位置にあり, より新出的な群とされている。さらに4-
2-3号墳の順で新旧関係を示唆されている。確かに4号墳には在地系の土器が目立ち, 2号墳には小
形器台, 3号墳には小形埴が存在するが, いずれも草刈Ⅱ期の範疇にあてはめたい。

41-(4) 二又堀5, 6, 7, 8号墳(第121図) 草刈Ⅱ期(前半)併行

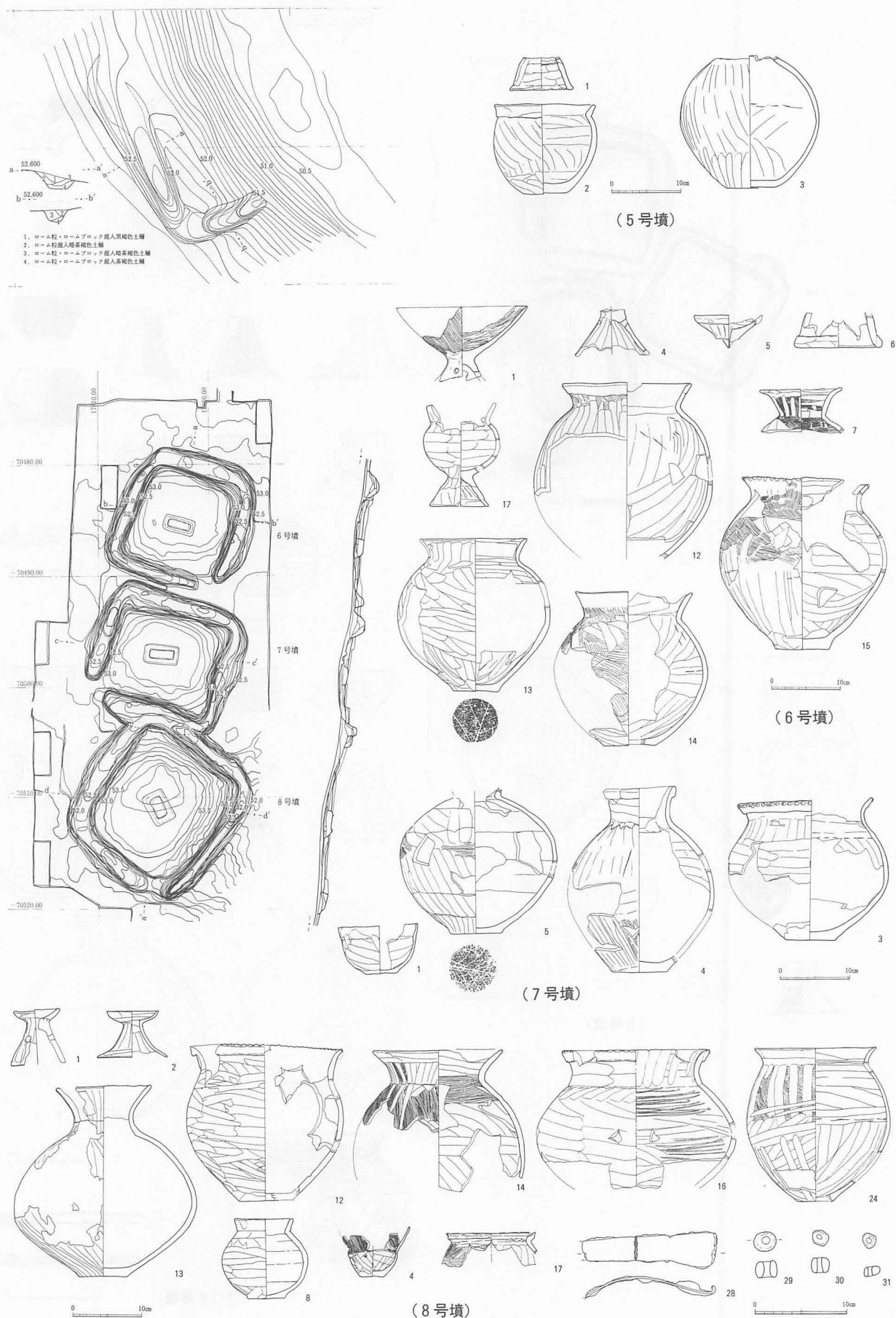
- ②墳形 いずれも方墳
- ③規模 5号墳=南西辺外径で7.5m
6号墳=北東辺6.9m, 南東辺6.5m, 南西辺7.0m, 北西辺7.8m(いずれも内径)
7号墳=北東辺8.5m, 南東辺7.5m, 南西辺8.4m, 北西辺6.3m(いずれも内径)
8号墳=北東辺8.9m, 南東辺11.2m, 南西辺7.2m, 北西辺8.7m(いずれも内径)
- ④墳丘 5号墳以外いずれも有り, 僅かに残る
- ⑤主体部 5号墳以外いずれも木棺直葬
- ⑥概要 5号墳は小形で方形周溝墓に近似する。8号墳の出土土器は12, 16は草刈Ⅰ期に比定しても
良いが, 定型化した小形器台や頸部く字状甕から草刈Ⅱ期(前半)の段階における残存品としておき
たい。7, 6号墳とも共通して在地的な甕が見られ, いずれも同様の時期と考えられる。報告のとおり
上記の2, 3, 4号墳の一群に先行している感が強い。(5号墳を除き)いずれも隅に陸橋部があり, 木
棺直葬を用いているが, 遺物量の割には装飾品類の出土に乏しい。



第119図 二又堀遺跡全体図（上），SK -009平・断面図，出土遺物図（下）



第120図 二又堀2号～4号墳測量図，出土遺物図



第121図 二又堀5号～8号墳測量図，出土遺物図

42. 尾畑台（おばただい）1号墳（第122図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市下根岸字台654ほか

②墳 形 陸橋付方墳

③規 模 不明（12.2m（台状部）、20m（周溝含む）と推定される）

④墳 丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概 要 小櫃川の中流域左岸の標高約60mの丘陵上に位置する方墳である。北側は調査区外に延びており、全容は不明である。検出された周溝は、南側で長さ17.6m、東側で長さ12m、幅は3.2m～4.1m、深さ1.2mを測る。南側周溝の中央付近で、地山を掘り残した陸橋部（幅1.28m）が検出された。

主体部は、検出されなかった。古墳に伴う遺物には、周溝覆土から出土した壺・鉢・高杯などの土器がある。埴はひさご類形とも言えるが、草刈Ⅱ期でも前半期に多い。小形高杯の脚部接合部が太い形状も古相と言える。しかし、いずれの資料も断片的であり、おおむね草刈Ⅲ期の編年観を与えておきたい。

⑦報告書 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』 財団法人君津郡市文化財センター 1994

43. 西ノ窪（にしのかぼ）方形周溝墓（第123図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市下新田字西ノ窪1133

②墳 形 方墳（報告では方形周溝墓）

③規 模 長軸16.5m、短軸15.5（周溝含む）

④墳 丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概 要 周溝はかなり歪みのある平面形であり、深さも一定でない。北東辺に陸橋部を有する。「五領2式」と報告された土器群が周溝内より多量に出土している。甕や小形器台、小形埴の形状からすると草刈Ⅱ期に比定される。

⑦報告書 『西ノ窪遺跡』 袖ヶ浦市教育委員会 1985

44. 上大城（かみおおしろ）2～7号墳（第124、125図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市代宿字上大城

②墳 形 いずれも方墳（報告では方形周溝墓）

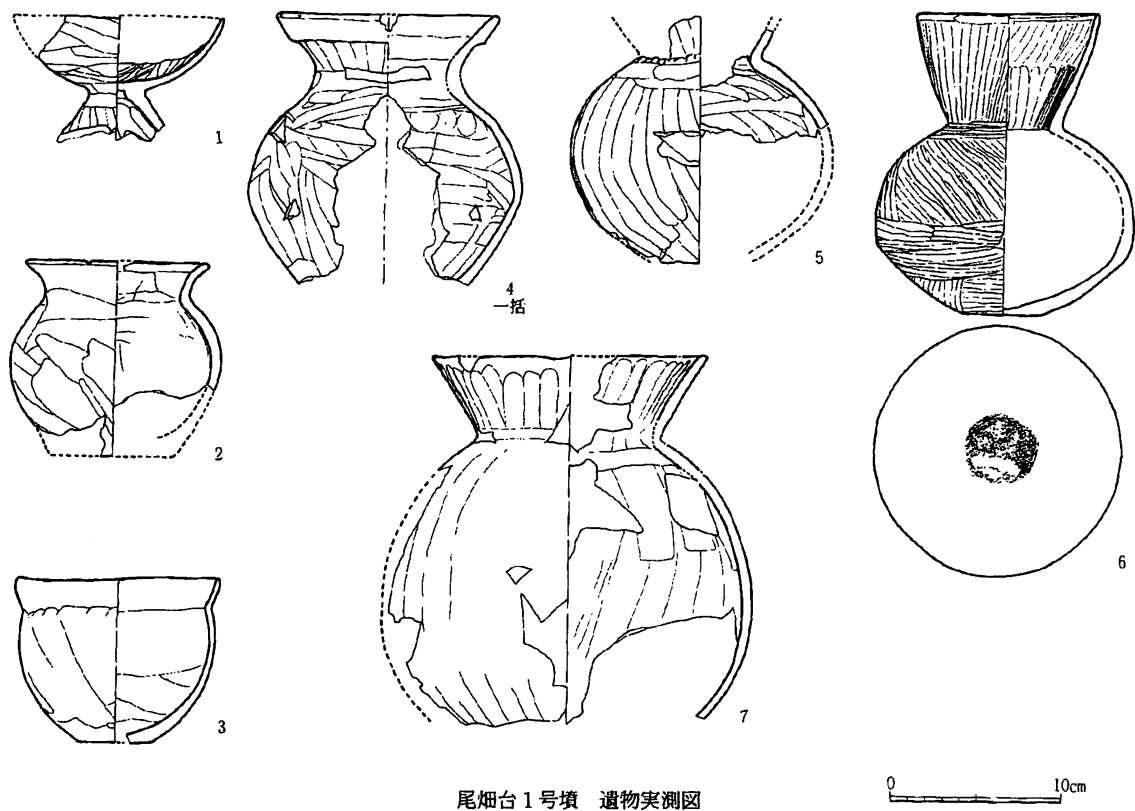
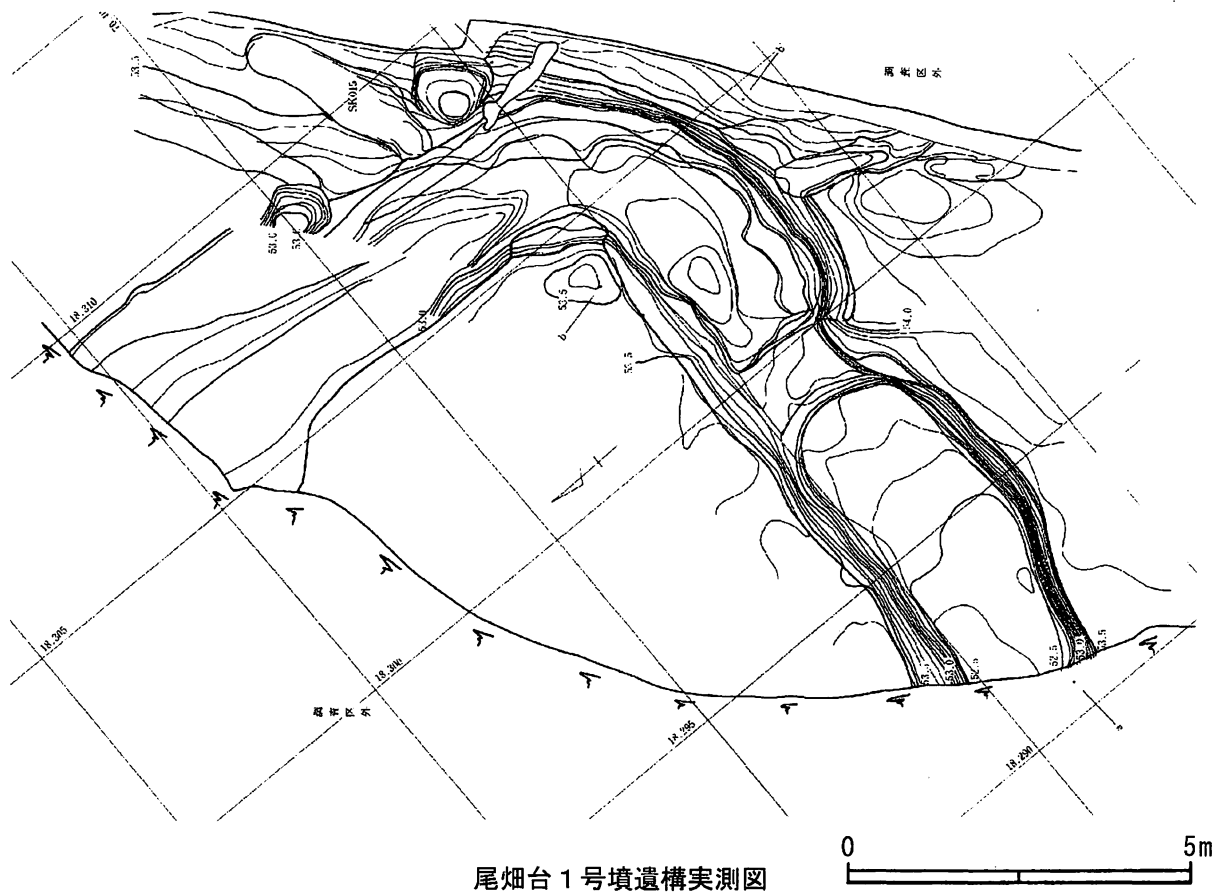
③規 模 2号＝南北11m、東西10.96m、3号＝南北8.3m、東西6.6m 4号＝南北5.6m、東西4.2m
5号＝南北11.5m、東西11m（内径）6号＝南北5.2m、東西4.7m 7号＝不明

④墳 丘 共に無し

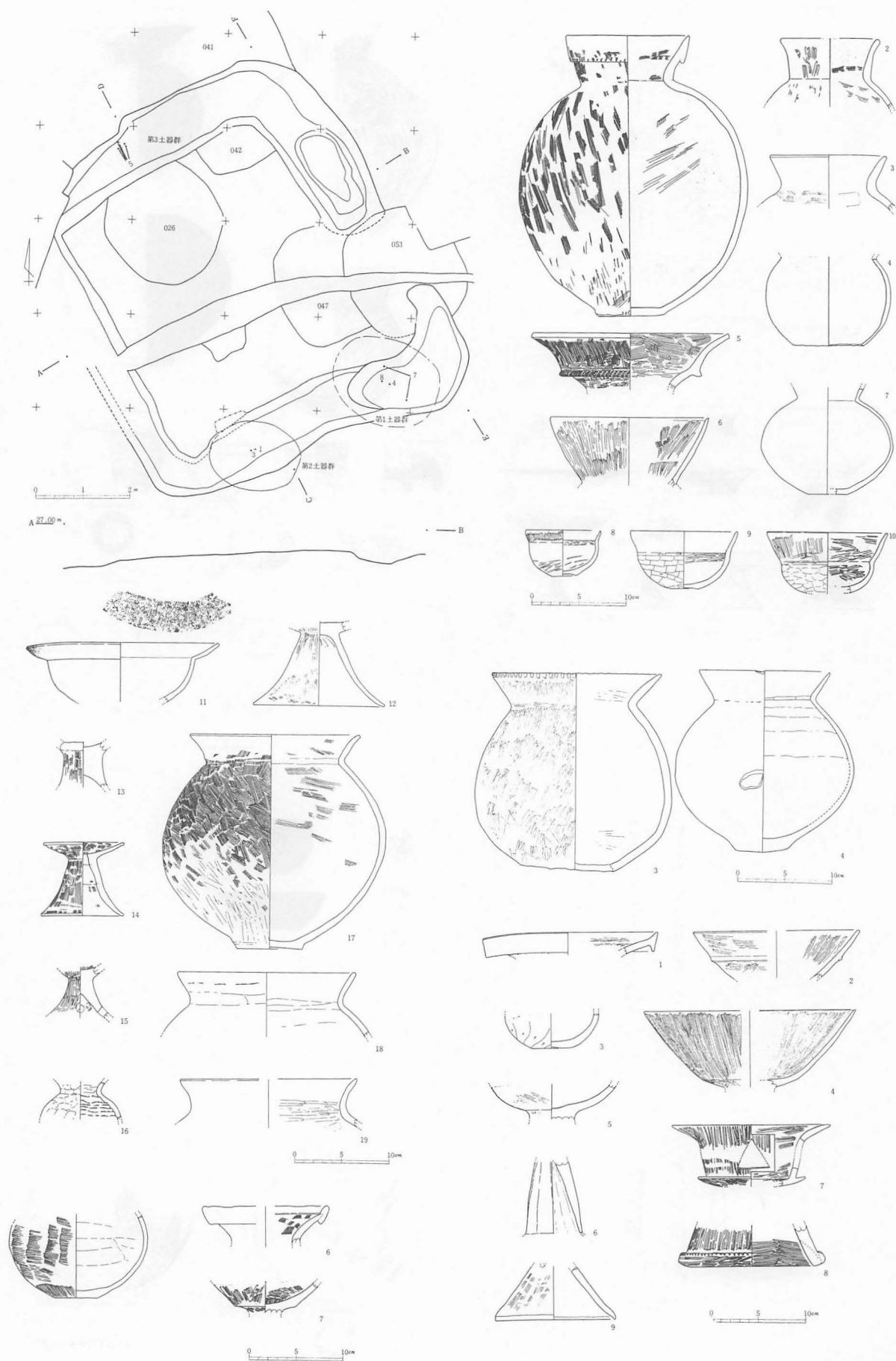
⑤主体部 2号＝木棺墓、3、4、6、7号＝不明 5号＝周溝内土坑

⑥概 要 標高約44mの広い平坦面に弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落が存在し、報告者の言う前期Ⅱ期～Ⅲ期の段階で方形周溝墓が出現している。前期Ⅲ期は草刈Ⅲ期にほぼ一致している。これらの方形周溝墓群で共通する点は土玉の出土であり、集落においても定着していた日常品である。ガラス玉、金属器等の出土が皆無であり、「古墳時代の方形周溝墓」として「古墳」との質的な区分が主張されよう。しかし、こうした「貧弱な副葬品」という概念規定では古墳との区分に、感覚的な判断がなされやすい。

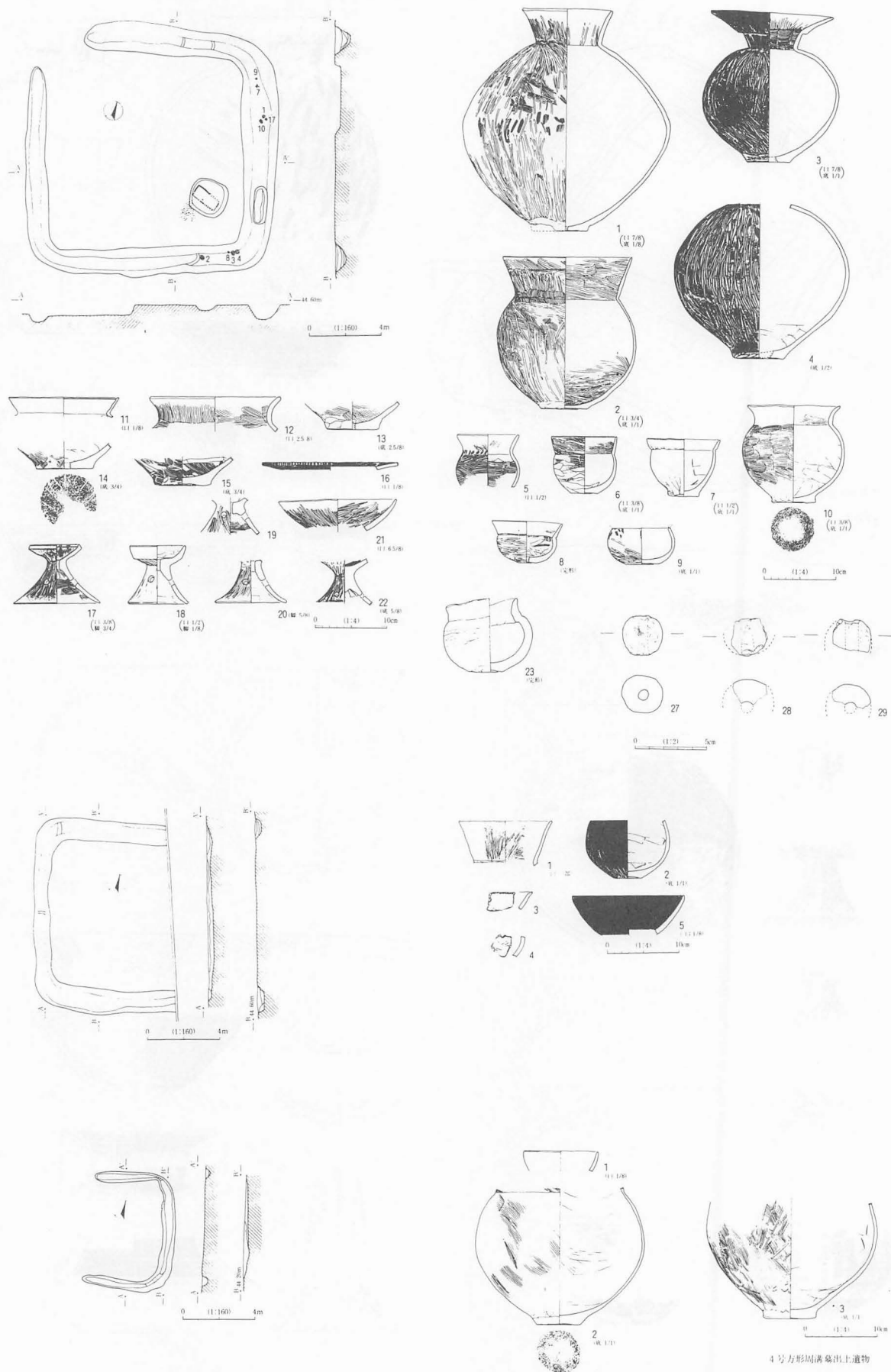
⑦報告書 『上大城遺跡発掘調査報告書』 財団法人君津郡市文化財センター 1994



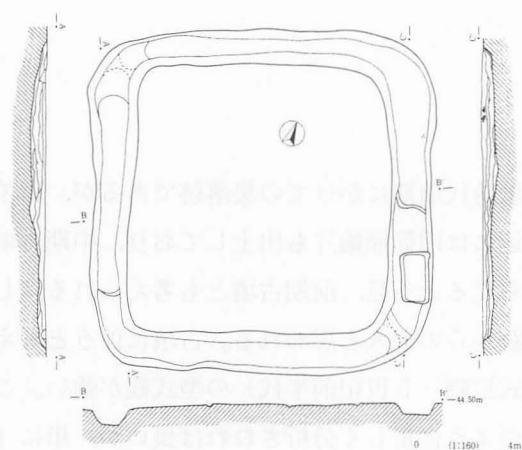
第122図 尾畑台1号墳平面図，出土遺物図



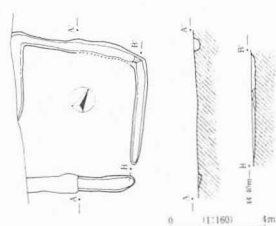
第123图 西ノ窪方形周溝墓平・断面图, 出土遺物图



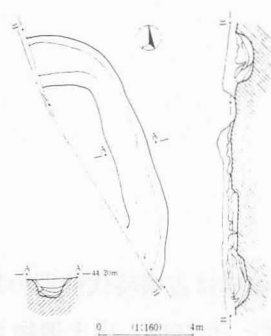
第124図 上大城2号～4号平・断面図，出土遺物図



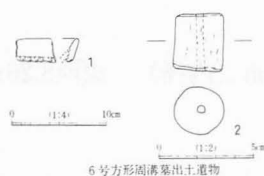
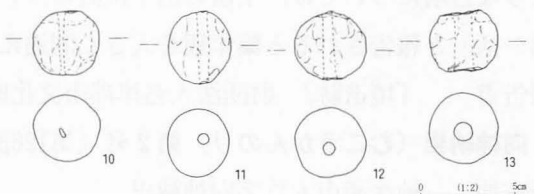
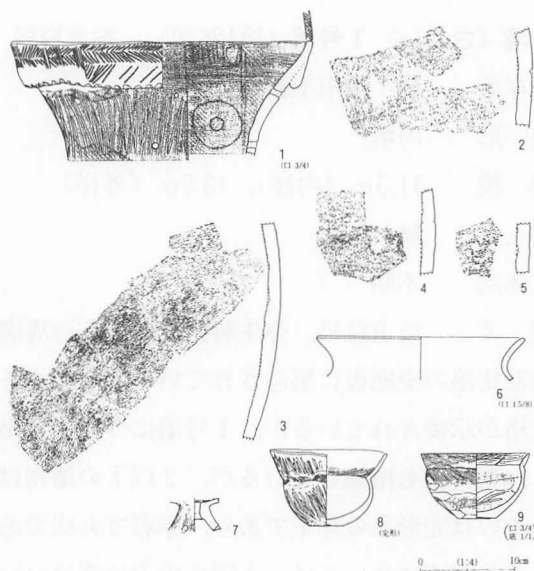
5号方形周溝墓



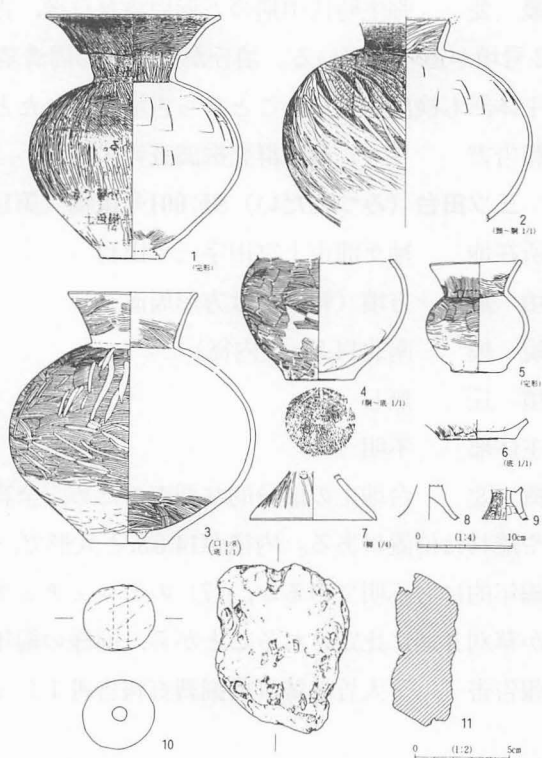
6号方形周溝墓



7号方形周溝墓



6号方形周溝墓出土遺物



7号方形周溝墓出土遺物

第125図 上大城5号～7号平・断面図，出土遺物図

45. 境（さかい）1号墳（第126図） 参考資料 中期

①所在地 袖ヶ浦市下新田1270

②墳 形 円墳

③規 模 11.5m（内径）、13.5m（外径）

④墳 丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概 要 境遺跡は、弥生時代後期の方形周溝墓群と古墳時代前期にかけての集落跡であるが、円墳は前期集落の廃絶後に築造されている。隣接する2号墳周辺には円筒埴輪片も出土しており、中期古墳の性格が示唆されているが、1号墳については出土土器から見ると一見、前期古墳とも考えられる。しかし、報告者も指摘しているが、2以下の遺物は前期集落跡からの混入と思われる。古墳に伴うと考えられるのは完形品の埴1であり、赤彩で丸底であり、和泉式以降（5世紀前半代）の型式観が強い。このような古墳については、土器の出土位置について本報告のように正しく分析されれば良いが、単に「古墳一括」と報告されると編年観を大きく間違える可能性が高い。

⑦報告書 『境遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター 1985

46. 向神納里（むこうかんのり）第2号（第126図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市大竹字向神納里

②墳 形 方墳

③規 模 南北7.96m（内径） 東西8.26m（内径）

④墳 丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概 要 弥生時代中期の方形周溝墓群後、古墳時代前期集落が営まれ、その時期に離れた位置に1、2号墳が造られている。墳丘が無く方形周溝墓と区別できないが、集落から離れ、群を形成しておらず、主体部も検出されないことから古墳とされたと考える。

⑦報告書 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』 財団法人君津郡市文化財センター 1995

47. ミツ田台（みつただい）SE 001号遺構（第126図） 草刈Ⅱ期併行

①所在地 袖ヶ浦市上宮田字ミツ田台

②墳 形 方墳（報告では方形周溝墓）

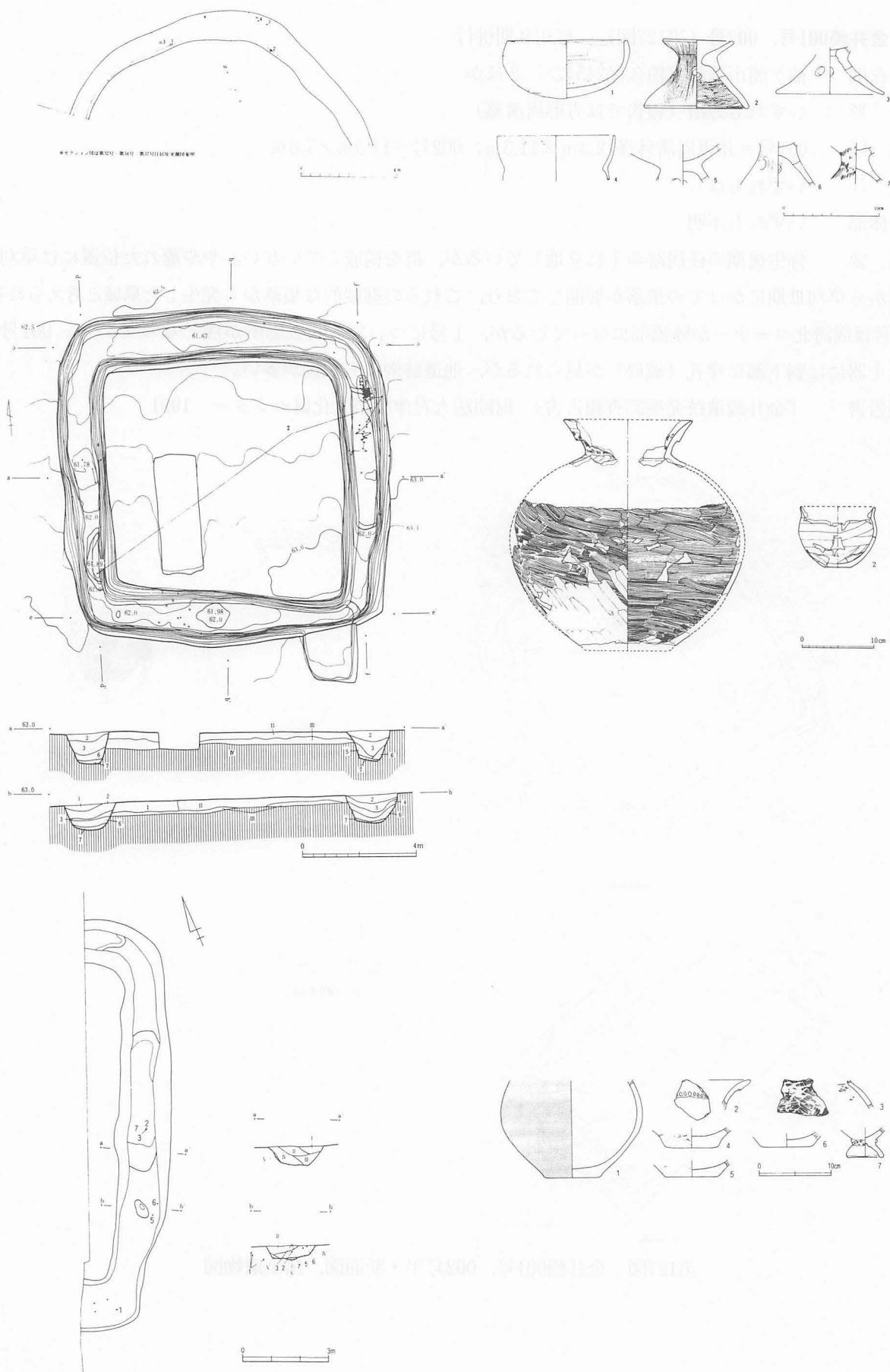
③規 模 南北14.5m（内径）

④墳 丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概 要 台地上の部分的な調査のため、全容は明らかでないが、本遺構は古墳時代前期の集落とはやや離れた位置にある。内径が14.5mと大形で、現状では方墳との区別がつかない。出土遺物も少なく、編年的にも不明であるが、(7)のミニチュア土器と同様のものがSI009 A号等にも見られ、これらが草刈Ⅱ期に比定されることから、同様の編年観を与えておきたい。

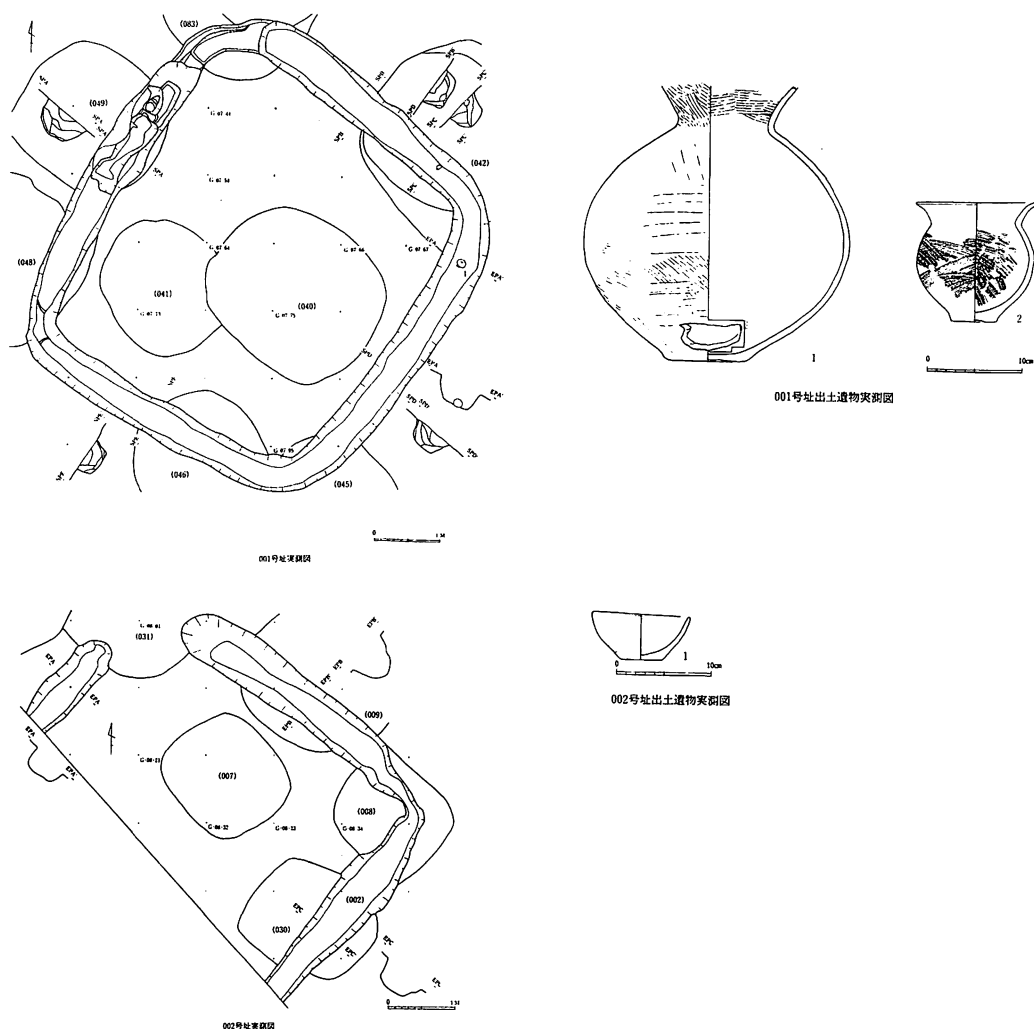
⑦報告書 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』 財団法人君津郡市文化財センター 1991



第126図 境1号墳，向神納里第2号，三ツ田台 SE 001号平・断面図，出土遺物図

48. 金井崎001号, 002号 (第127図) 草刈Ⅱ期併行

- ①所在地 袖ヶ浦市蔵波字柏久保2454ひー2 ほか
 ②墳形 いずれも方墳 (報告では方形周溝墓)
 ③規模 001号=北東周溝外径12.3m×11.3m, 002号=11.5m×7.8m
 ④墳丘 いずれもなし
 ⑤主体部 いずれも不明
 ⑥概要 弥生後期の住居跡の上に立地しているが, 群を構成していない。やや離れた位置には草刈Ⅱ期から草刈Ⅲ期にかけての集落が展開しており, これらの継続的な集落から発生した墓域と考えられる。2号は周溝北コーナーが陸橋部になっているが, 1号についても同じ場所が浅くなっている。001号出土土器には胴下部に穿孔 (破碎) が見られるが, 他遺跡例にも類例が多い。
 ⑦報告書 『金井崎遺跡発掘調査報告書』 財団法人君津郡市文化財センター 1991



第127図 金井崎001号, 002号平・断面図, 出土遺物図

49-(1) 田川1号(第128図) 草刈Ⅱ期後半～草刈Ⅲ期併行

①所在地 木更津市字田川(2号も同じ)

②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 東西10m, 南北9.4m(外周)

④墳丘 無し

⑤主体部 周溝内土坑

⑥概要 標高約70mの台地上に古墳時代前期集落とともに立地している。1号は草刈Ⅰ期後半併行の竪穴住居跡を切っており、出土遺物は頸部がくの字状の平底甕を中心に、土器が多量に見られる。口縁部が大きく広がる小形埴や頸部幅の広い埴は草刈Ⅲ期に比定されるが、徹底した丸底胴部の平底甕や小形器台の残存には草刈Ⅱ期後半まで遡る編年観がある。

⑦報告書 『田川遺跡群発掘調査報告書』田川遺跡群発掘調査会 1980
(2号も同じ)

49-(2) 田川2号(第128図) 草刈Ⅱ期併行

②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 東西12.1m, 南北11.7m(外周)

④墳丘 有り, 約30cm

⑤主体部 中央土坑

⑥概要 1号と異なり低墳丘を有する。また、周溝東コーナーが陸橋部となっており、中央主体部も存在する。規模も大きく、出土遺物を見ても1号とは明らかに異なる。時期的には1号に先行している。

50. 文脇(ふみわき)方墳1(第129図) 草刈Ⅲ期併行

①所在地 袖ヶ浦市野里

②墳形 方墳

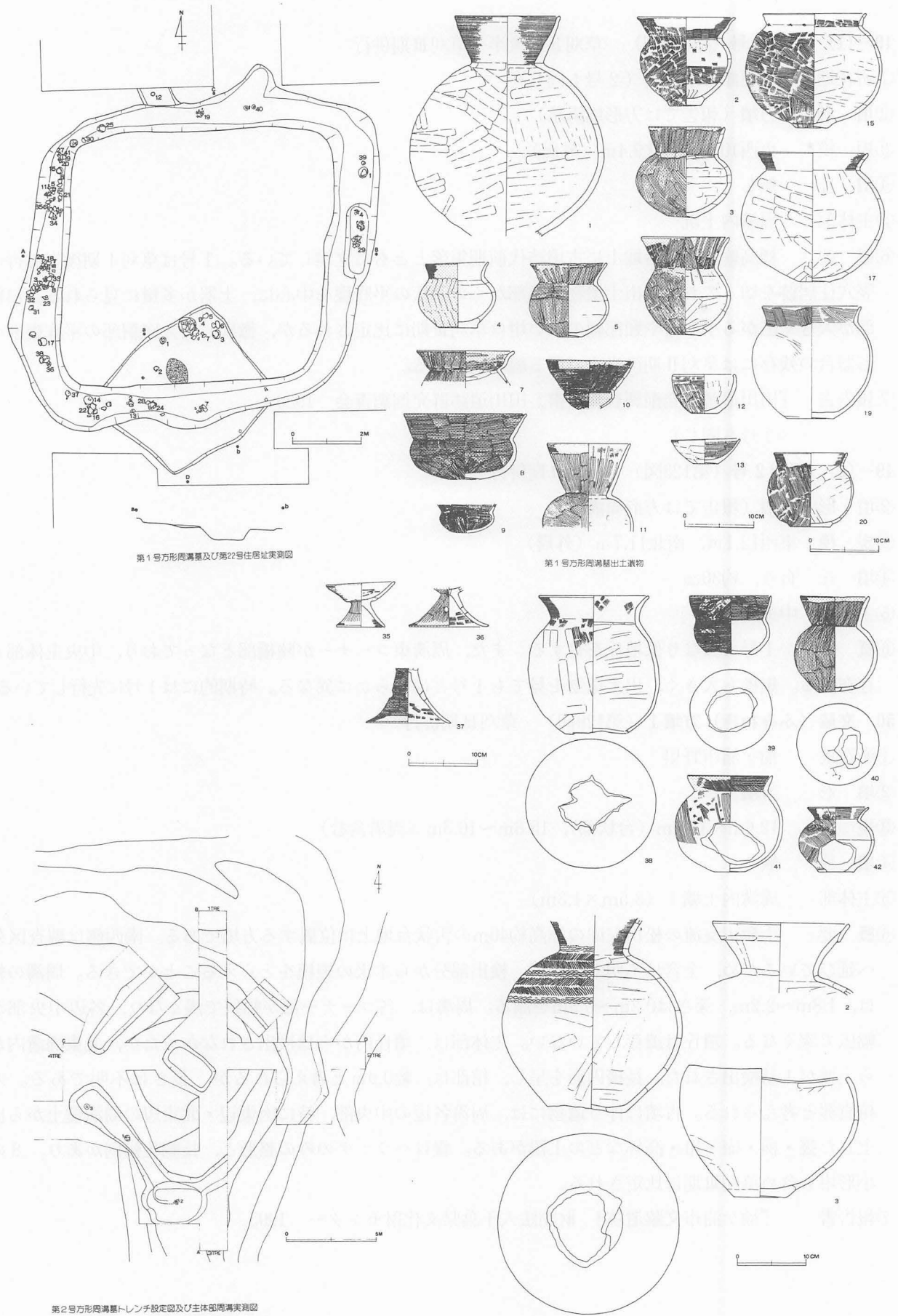
③規模 12.6m～12.9m(台状部), 15.6m～16.3m(周溝含む)

④墳丘 無し

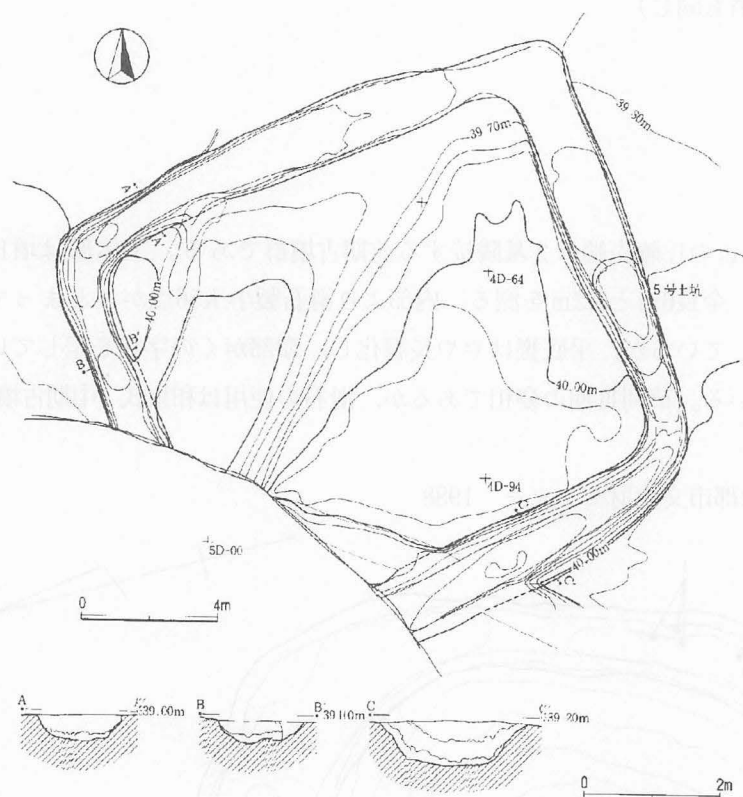
⑤主体部 周溝内土壇1(3.5m×1.3m)

⑥概要 小櫃川支流の松川左岸の標高約40mの舌状台地上に位置する方墳である。南西側は調査区外へ延びているため、全容は不明であるが、検出部分から本来の規模をとらえることができる。周溝の幅は、1.8m～2.2m, 深さは0.2m～0.6mを測る。周溝は、各コーナー部が幅狭で浅くなり、各辺中央部が幅広で深くなる。墳丘は遺存していない。主体部は、墳丘内からは検出されなかったが、北東周溝内から土壇が1基検出された。長楕円形を呈し、棺部は、幅0.9mと考えられるが、長さは不明である。木棺直葬と考えられる。古墳に伴う遺物には、周溝各辺の中央部、特に南東辺・北東辺の周溝覆土から出土した甕・碗・壺・埴・高杯などの土器がある。甕はヘラナデのみの整形と、長胴化傾向があり、8の小形埴も含め草刈Ⅲ期に比定される。

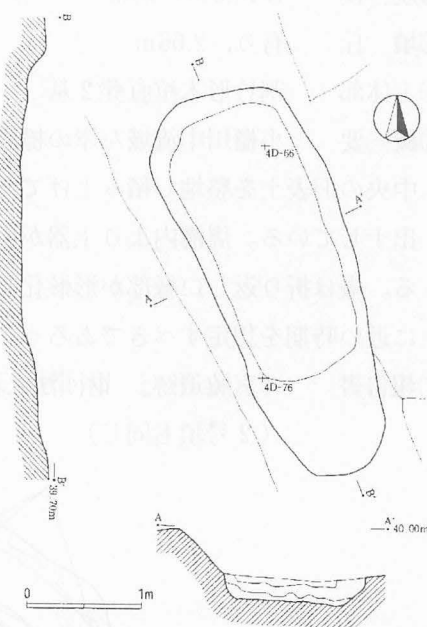
⑦報告書 『袖ヶ浦市文脇遺跡』財団法人千葉県文化財センター 1995



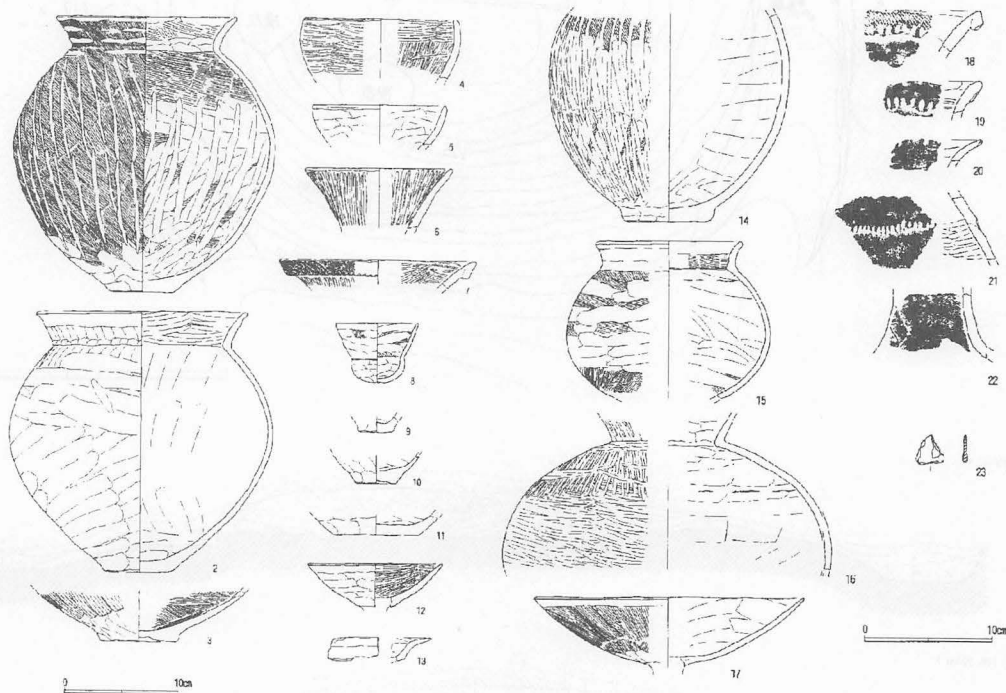
第128図 田川1号・2号平・断面図，出土遺物図



方墳1実測図



5号土坑実測図



方墳1出土遺物

第129図 文協方墳1平・断面図，出土遺物図

51-(1) 宮脇(みやわき) 3号墳(第130～132図) 草刈Ⅲ期併行

①所在地 木更津市田川字星谷(2号墳も同じ)

②墳形 円墳

③規模 径16.5m～18m

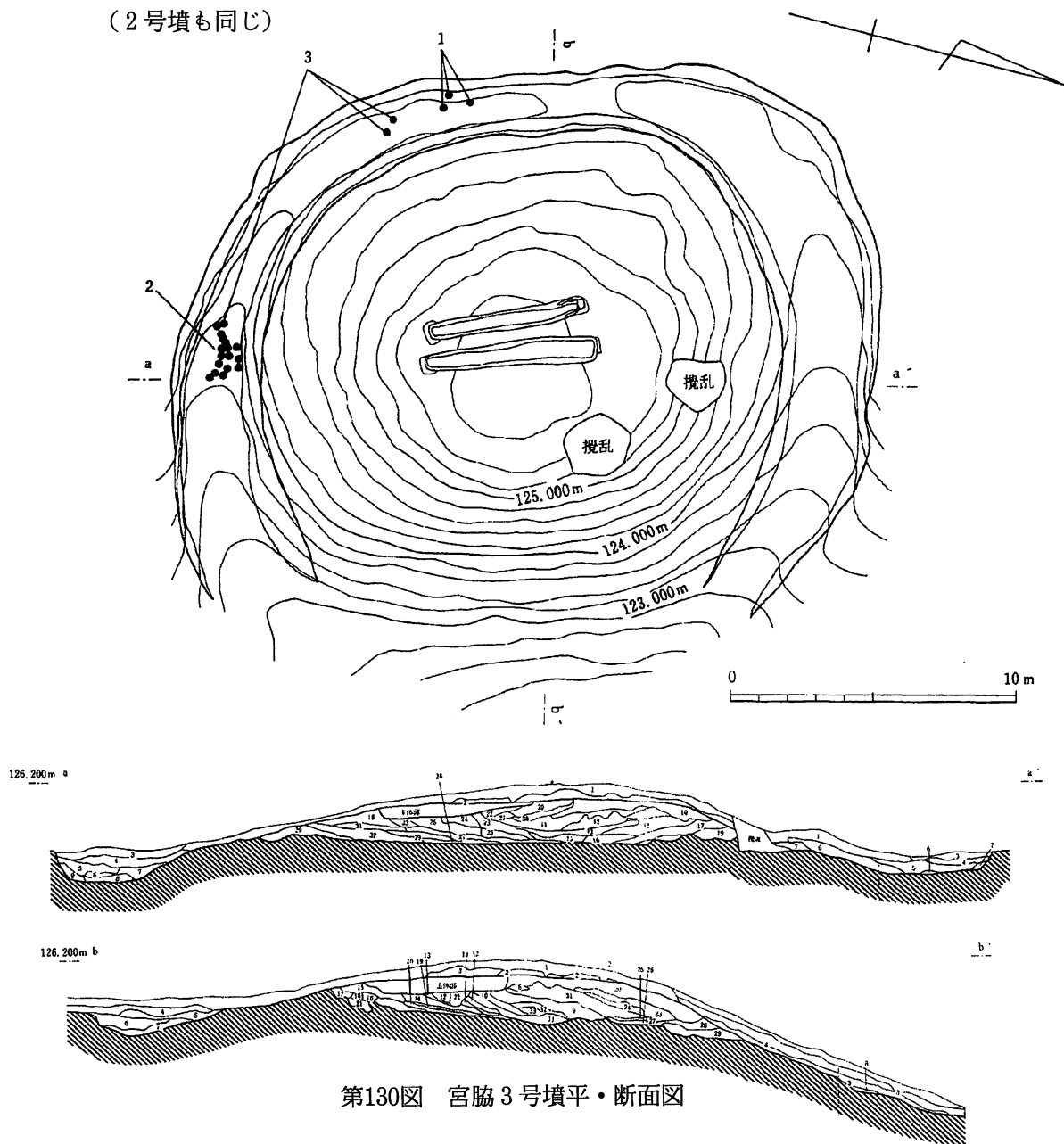
④墳丘 有り, 2.66m

⑤主体部 割竹形木棺直葬2基

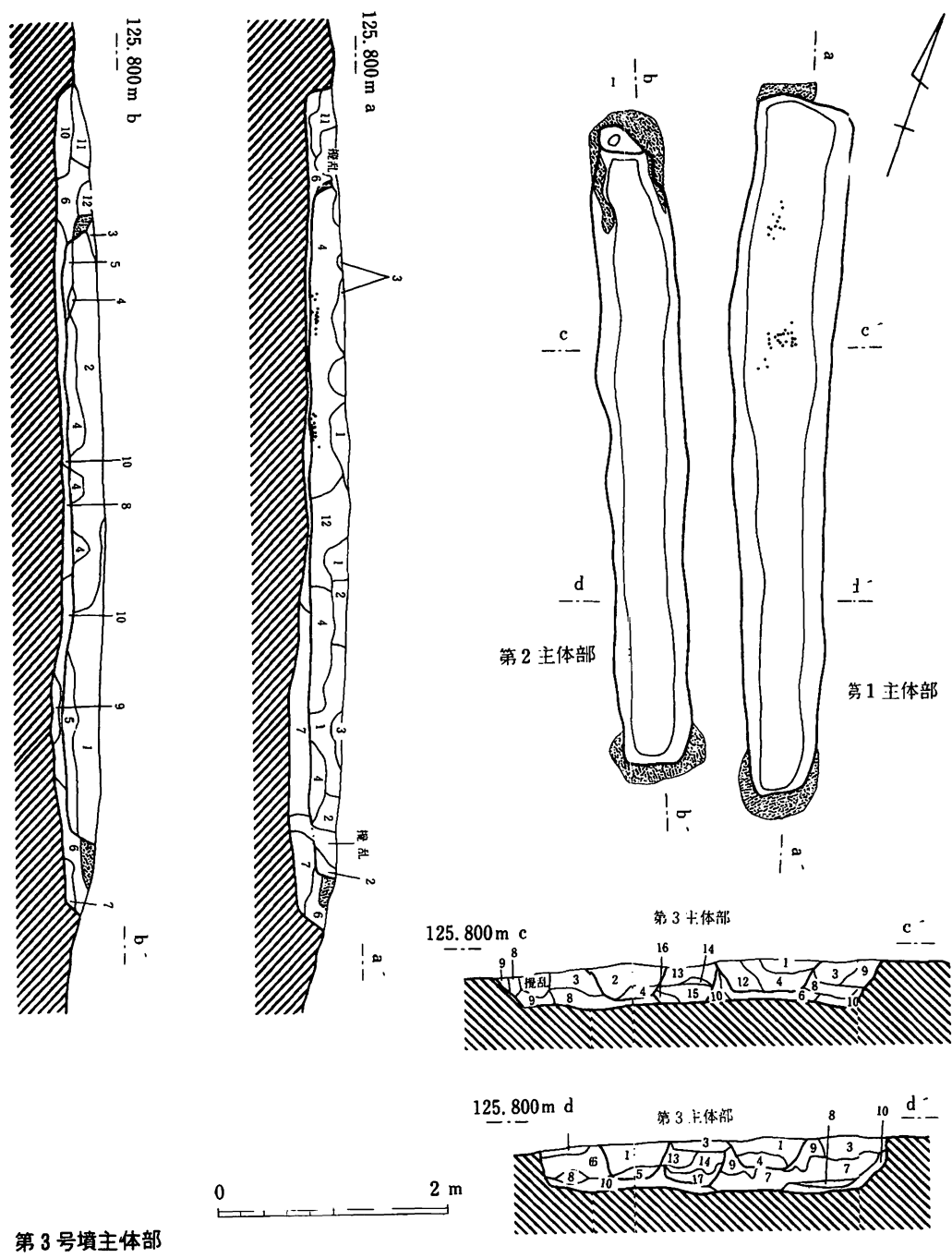
⑥概要 小櫃川中流域左岸の標高125mの丘陵先端に2基隣接する前期古墳群である。主体部は墳丘中央の旧表土を整地し積み上げてある。全長6mと5.2mを測る。内部より滑石製小玉56点がまとまって出土している。周溝内より土器が出土しているが、平底甕はやや長胴化し、頸部がくの字状を呈している。壺は折り返し口縁部が形骸化している。草刈Ⅲ期の姿相であるが、滑石の使用は和泉式(中期古墳)に近い時期を想定すべきであろう。

⑦報告書 『宮脇遺跡』 財団法人君津郡市文化財センター 1988

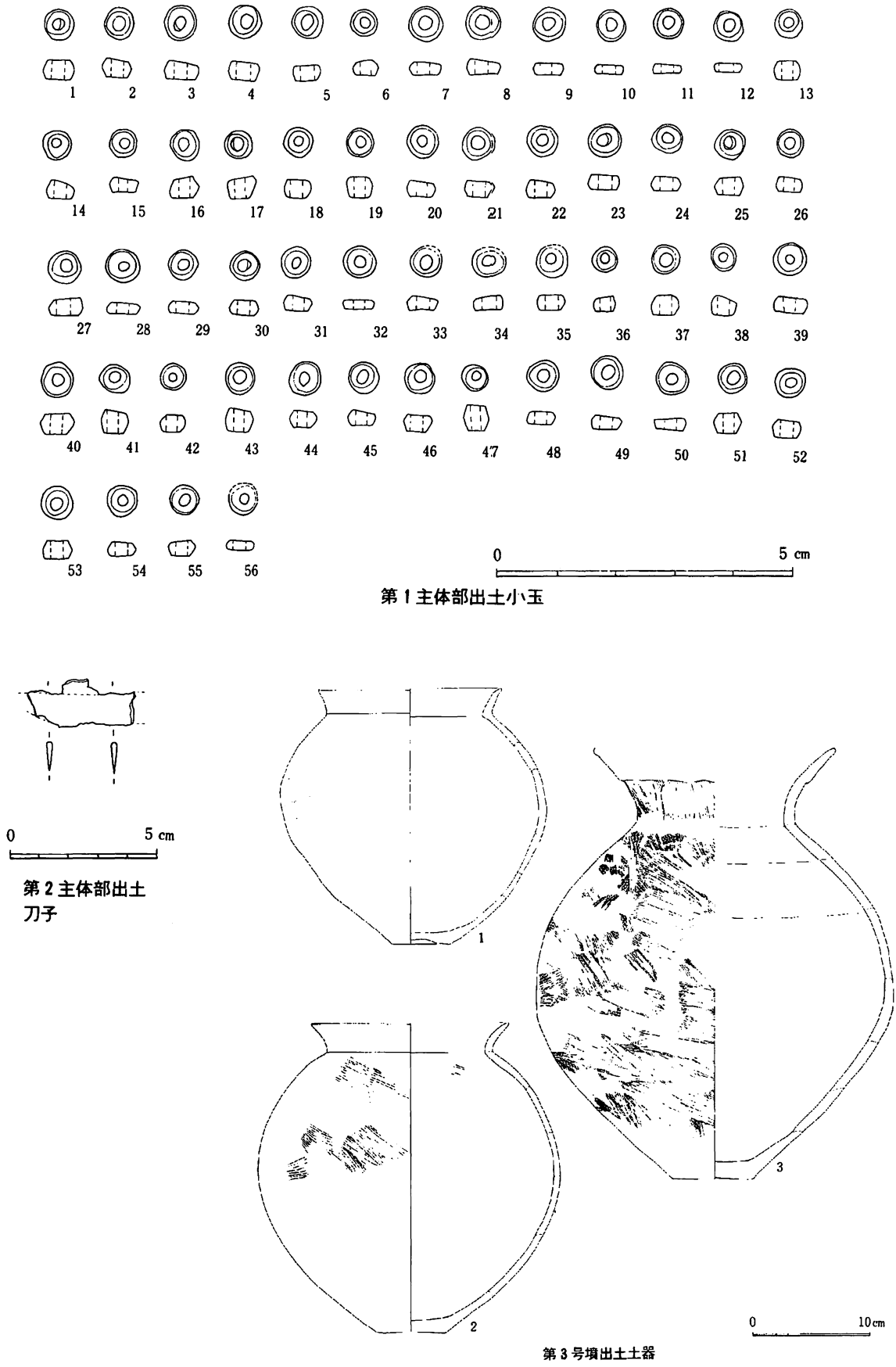
(2号墳も同じ)



第130図 宮脇3号墳平・断面図



第131図 宮脇3号墳主体部図



第132図 宮脇3号墳出土遺物図

51-(2) 宮脇2号墳(第133, 134図) 草刈Ⅲ期併行

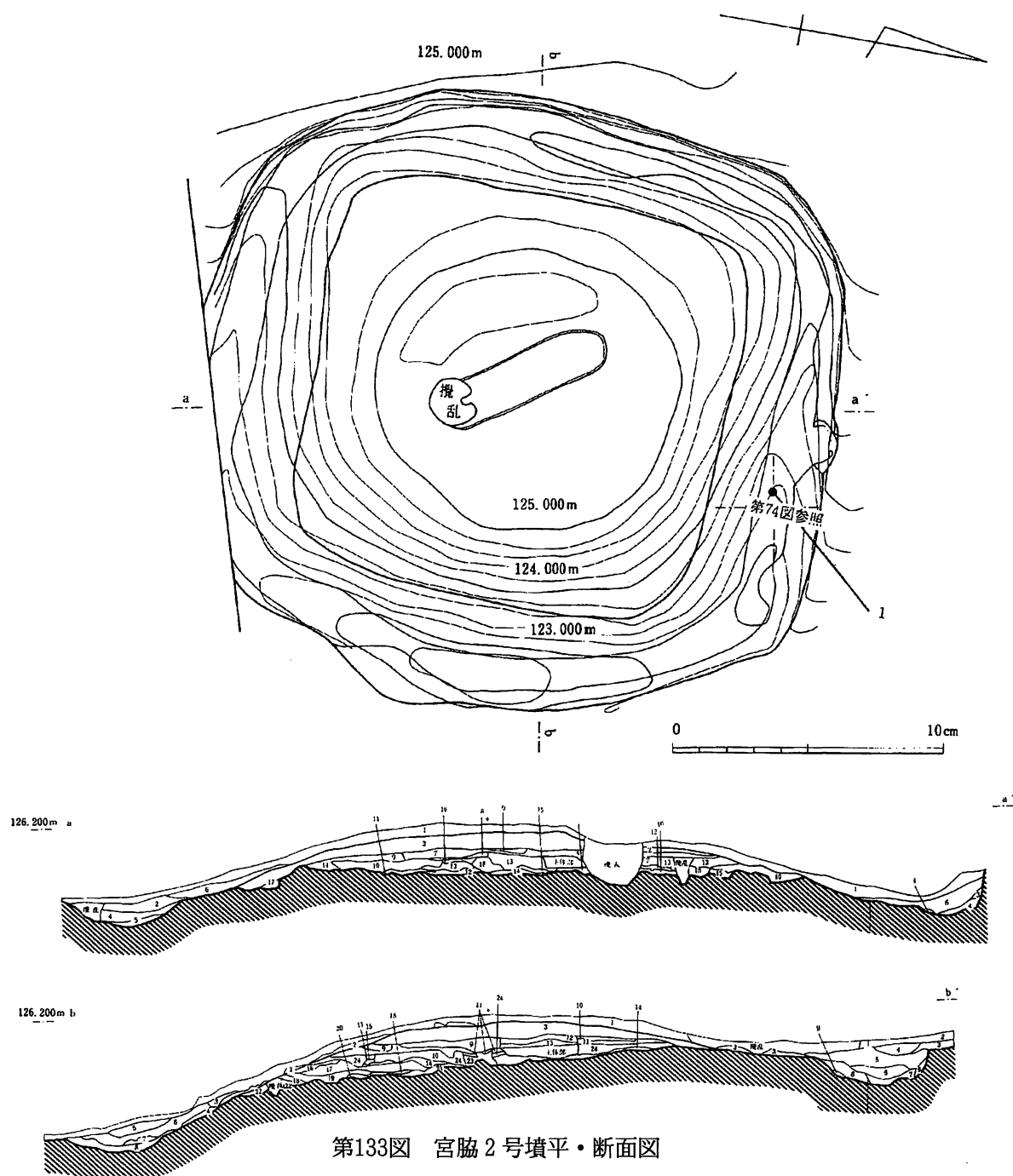
②墳形 方墳

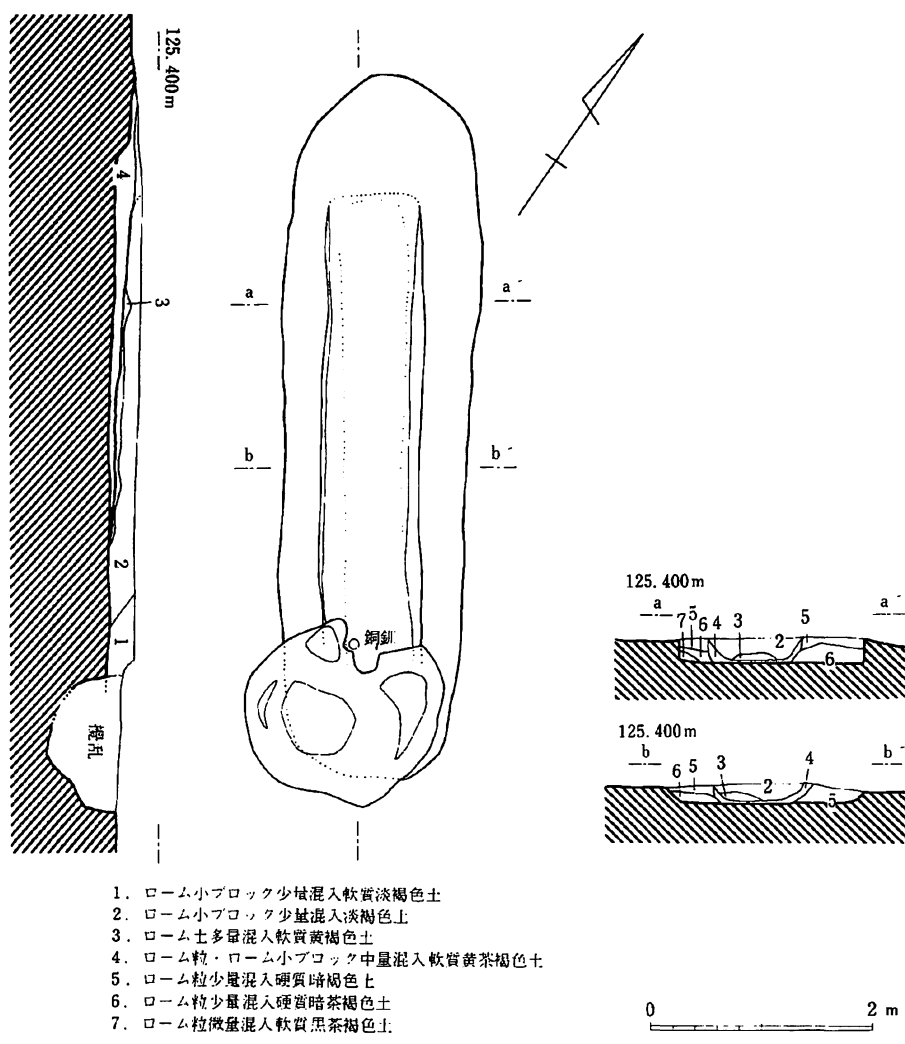
③規模 18.3m×19m

④墳丘 有り, 1.4m

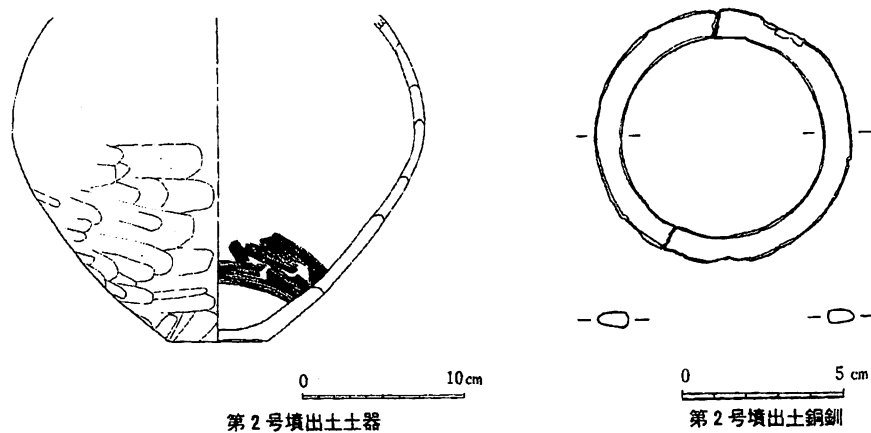
⑤主体部 割竹形木棺直葬

⑥概要 3号墳に隣接する。主体部は墳丘中央の旧表土を整地し積み上げている。出土土器は甕の胴部下半部片のみで時期決定はできない。報告者は前段階の方形周溝墓の存在から、方墳をこの遺跡の初現と捉えており、2号墳は3号墳以前の位置を与えている。しかし、銅釦のみの判断では、むしろ草刈Ⅲ期以降の古墳とも考えられる。しかし、2, 3号墳ともに割竹形木棺直葬であり、2号墳は方墳といっても四辺が膨れ気味である。両者はかなり近接した時期であることも想定できる。





第2号墳主体部



第134図 宮脇2号墳主体部図，出土遺物図

52. 浅間神社（せんげんじんじゃ）古墳（第135, 136図） 参考資料 草刈Ⅲ期か

- ①所在地 君津市上神田456
- ②墳 形 前方後円墳
- ③規 模 全長103.1m, 後円部径66.3m, 主軸上の前方部長42.4m, 前方部全面幅47～50m
- ④墳 丘 見かけの高さ約10m, 後円部と前方部の比高差6.97m
- ⑤主体部 不明
- ⑥概 要 1998年度に県史考古部会により測量調査が実施された。台地の突端を刻む谷によって区切られた舌状地形を最大限に利用し築かれた前方後円墳である。

前方部が短小であり、墳形の検討では後円部径と前方部長の主軸上での比は6 : 4である。釈迦山古墳、今富塚山古墳、能満寺古墳、しゃくし塚古墳等の著名な前期大形古墳に共通している。近接する白山神社古墳、飯籠塚古墳はくびれ部の屈曲が強く前方部が大きく開く形状を呈しており、形状においてかなり異なることが判明した。

- ⑦報告書 萩原恭一、白井久美子、亀井宏行「君津市浅間神社古墳測量調査報告」『千葉県史研究』第8号 2000

53. 飯籠塚（いごづか）古墳（第137, 138図） 参考資料 草刈Ⅲ期か

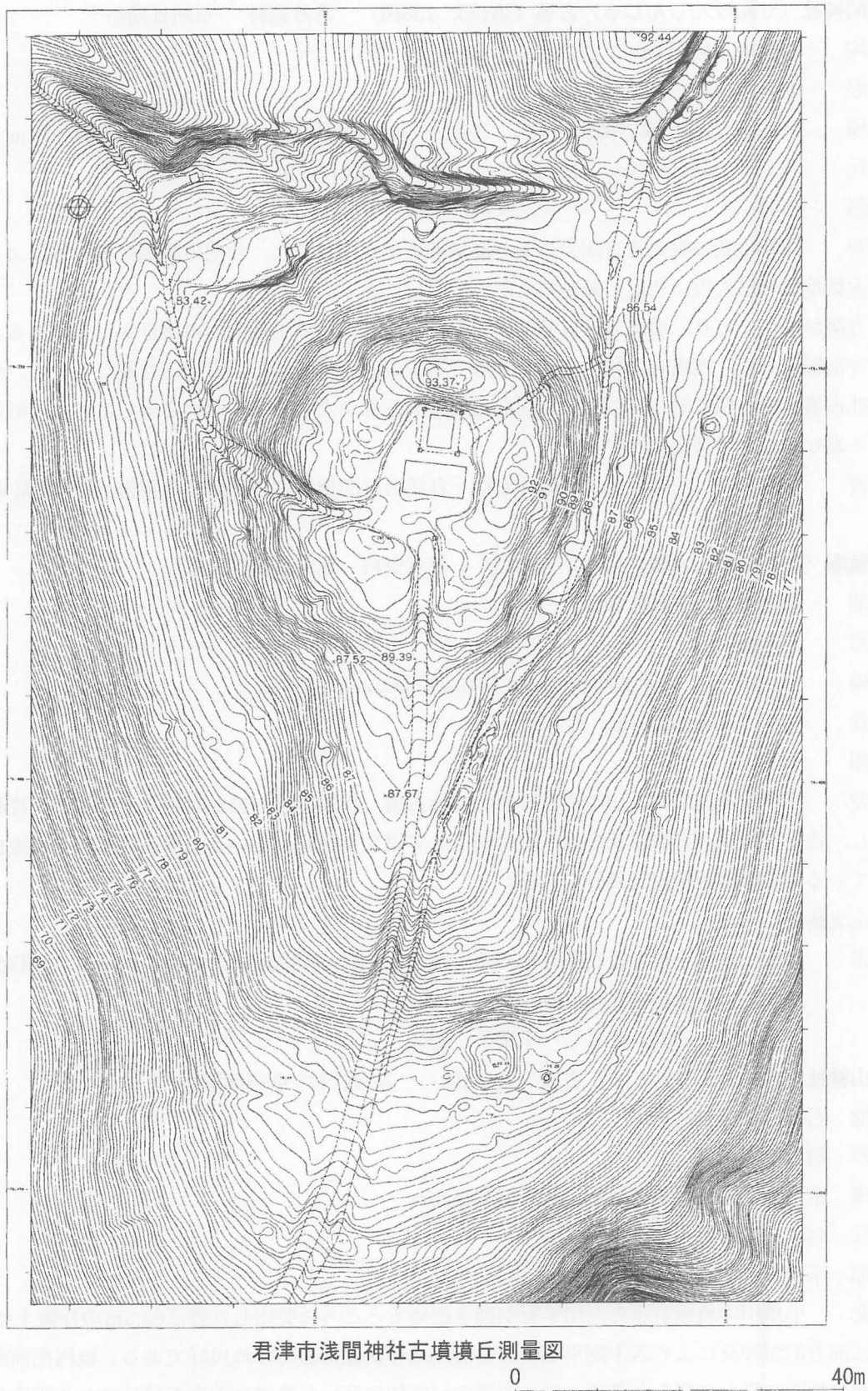
- ①所在地 君津市岩出字飯籠塚
- ②墳 形 前方後円墳
- ③規 模 全長102m, 後円部径55m, 前方部端幅39m, 同長55m
- ④墳 丘 有り, 後円部11.5m, 前方部7.5m
- ⑤主体部 不明
- ⑥概 要 櫃川中流域左岸の川を挟んで白山神社古墳、浅間神社古墳と対峙する丘陵上（標高79m）に位置し、舌状丘陵縁辺部の形状を最大限に利用して墳丘を築成している。墳丘は部分的に後世の改変を受けているものの遺存状況は良好である。

県指定史跡。

- ⑦報告書 小沢 洋「小櫃の首長墓をめぐる考察－飯籠塚古墳測量調査成果の検討－」『研究紀要』Ⅴ 財団法人君津郡市文化財センター 1991
『千葉県史研究』第8号 千葉県 2000

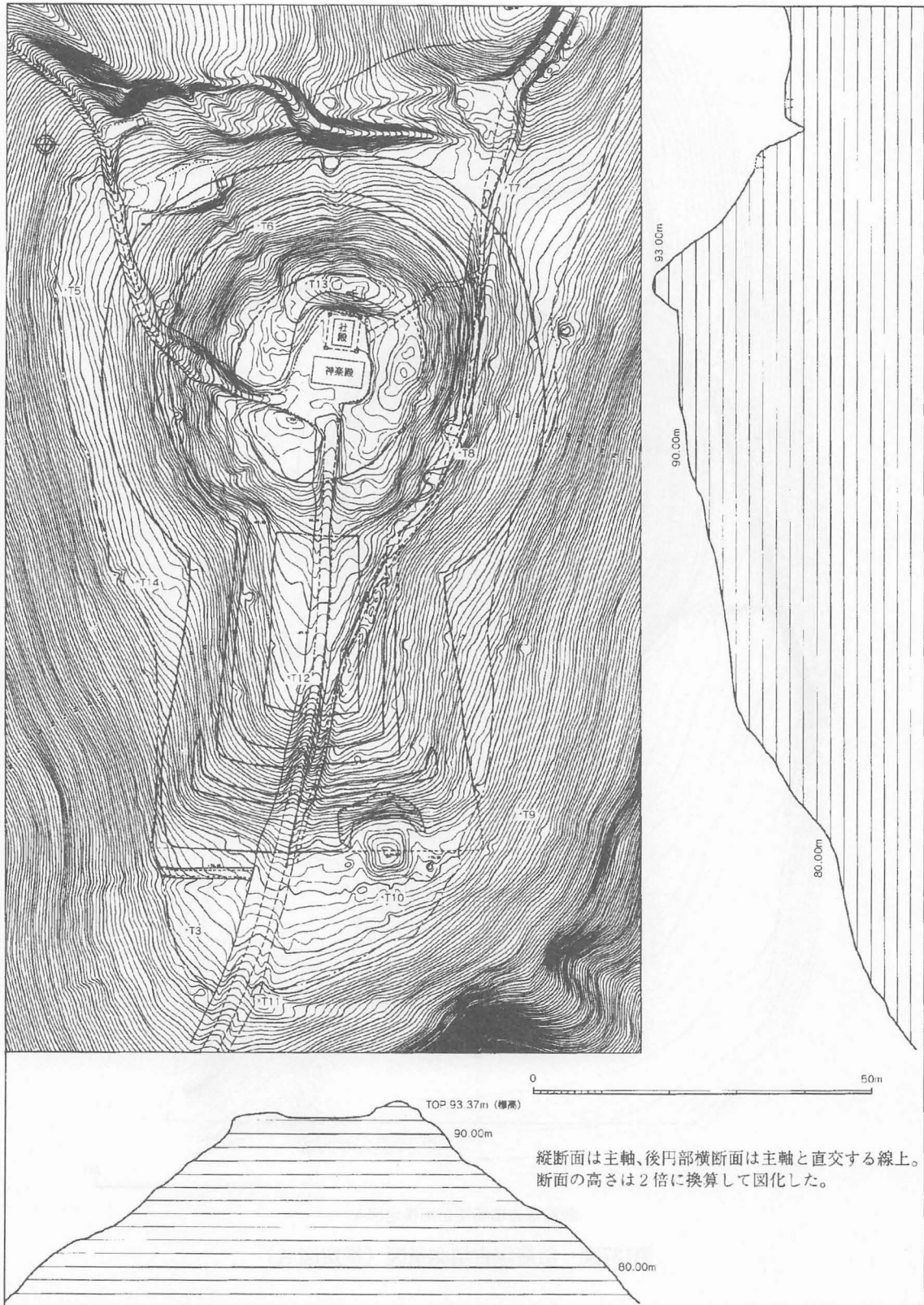
54. 白山神社（はくさんじんじゃ）古墳（第139図） 参考資料 草刈Ⅲ期か

- ①所在地 君津市俵田1452
- ②墳 形 前方後円墳
- ③規 模 全長88m, 後円部径52m, 前方部端幅40m
- ④墳 丘 有り, 後円部高10m
- ⑤主体部 不明
- ⑥概 要 小櫃川中流域右岸の河川平野が開き始めるところに突出した標高63.5mの丘陵上に位置する。墳丘は前方部が神社により若干削平を受けるが、遺存状況はおおむね良好である。後円部前面において幅15mの範囲が僅かに窪みが確認され、周溝の可能性が高いが後世に改変を受けており明確な周溝のラインは確定できない。墳丘には葺石や段築は確認できず、埴輪なども採集されていない。県指定史跡。
- ⑦報告書 『千葉県記念物実態調査報告書Ⅲ』 千葉県教育委員会 1995



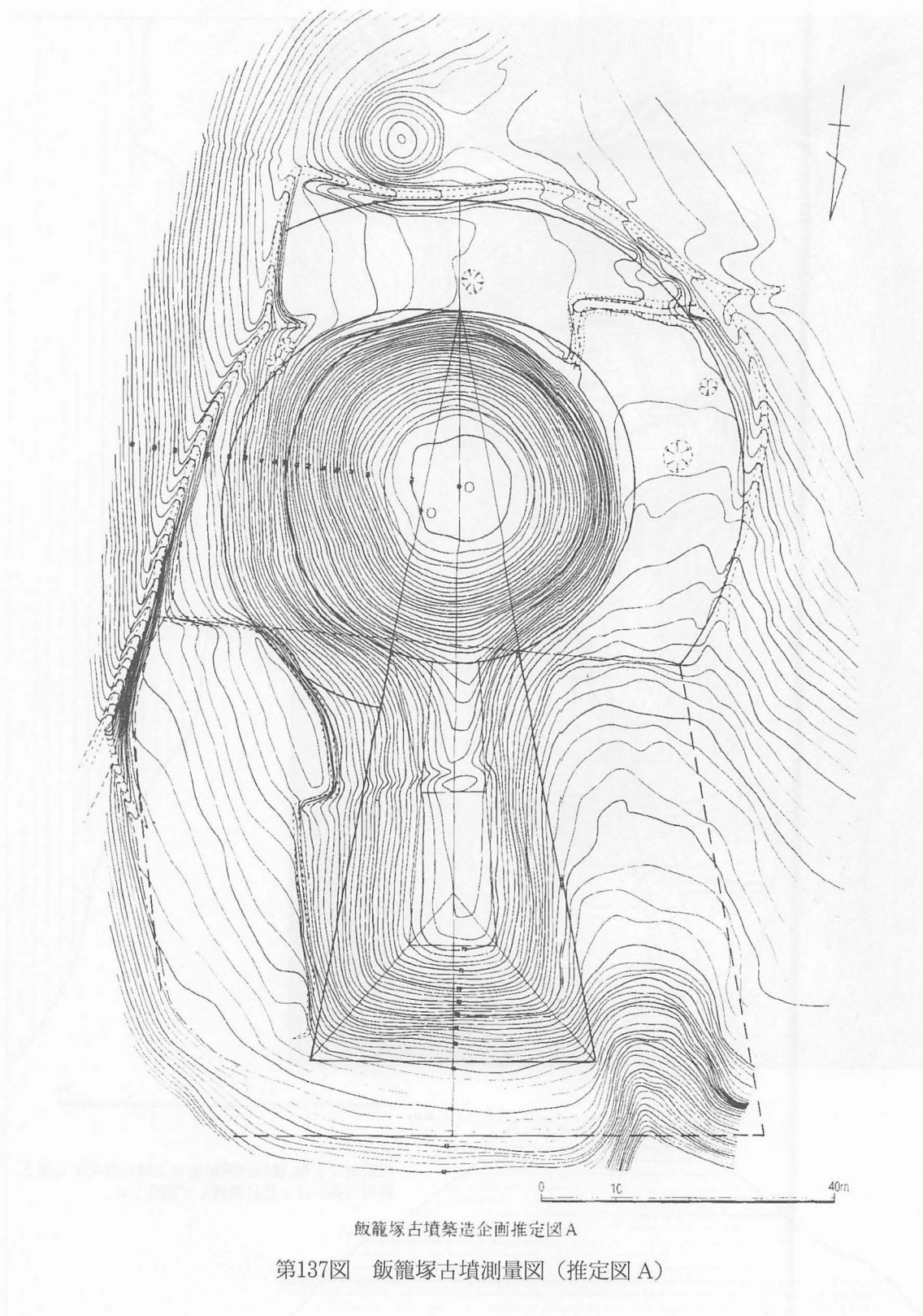
君津市浅間神社古墳墳丘測量図

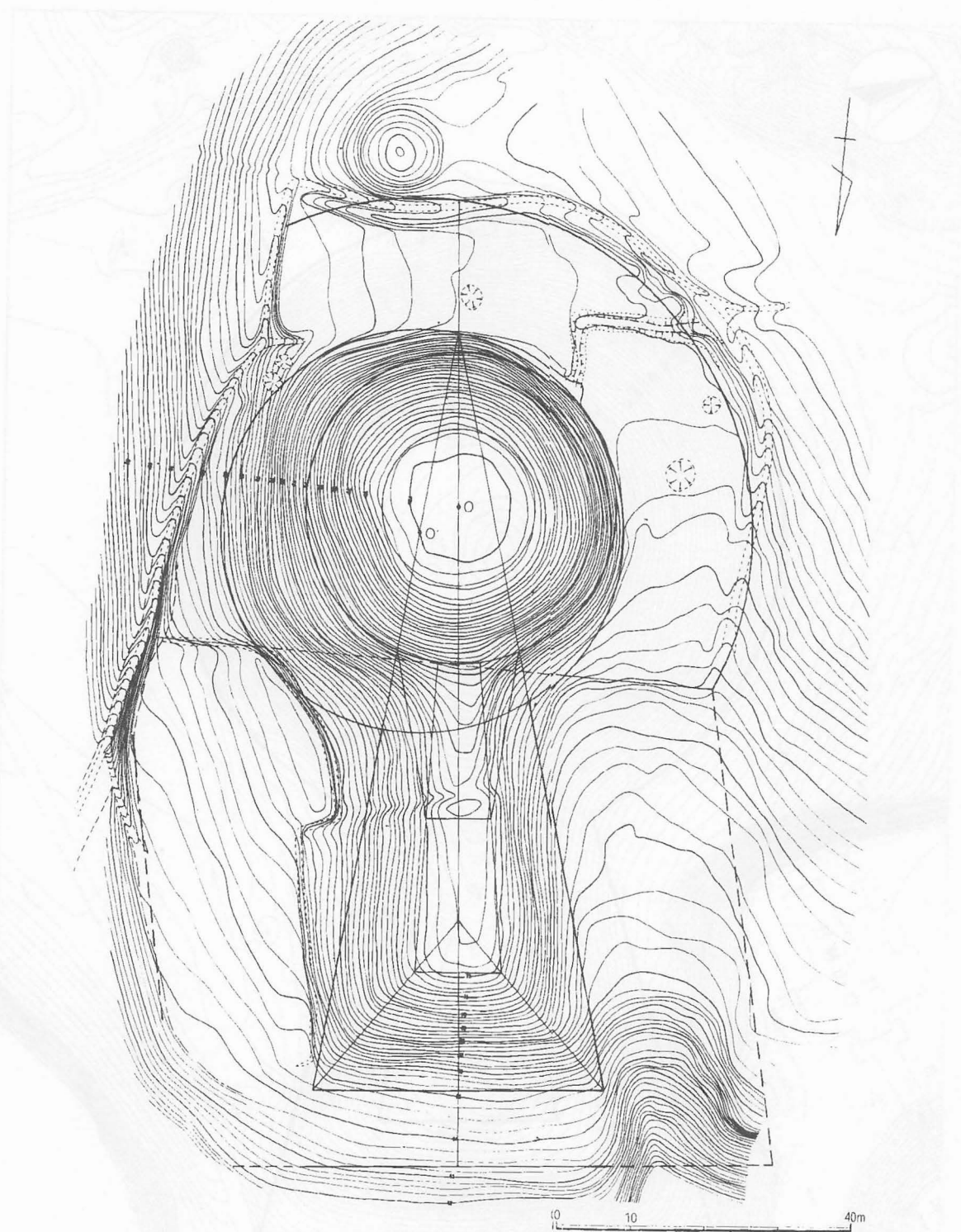
第135図 浅間神社古墳測量図(1)



浅間神社古墳現況・復元図

第136図 浅間神社古墳測量図(2)





飯籠塚古墳築造企画推定図B

第138図 飯籠塚古墳測量図（推定図B）



白山神社古墳復原図

第139図 白山神社古墳測量図

55-(1) 神田（じんでん）1号墳（第140～142図） 草刈Ⅱ期併行

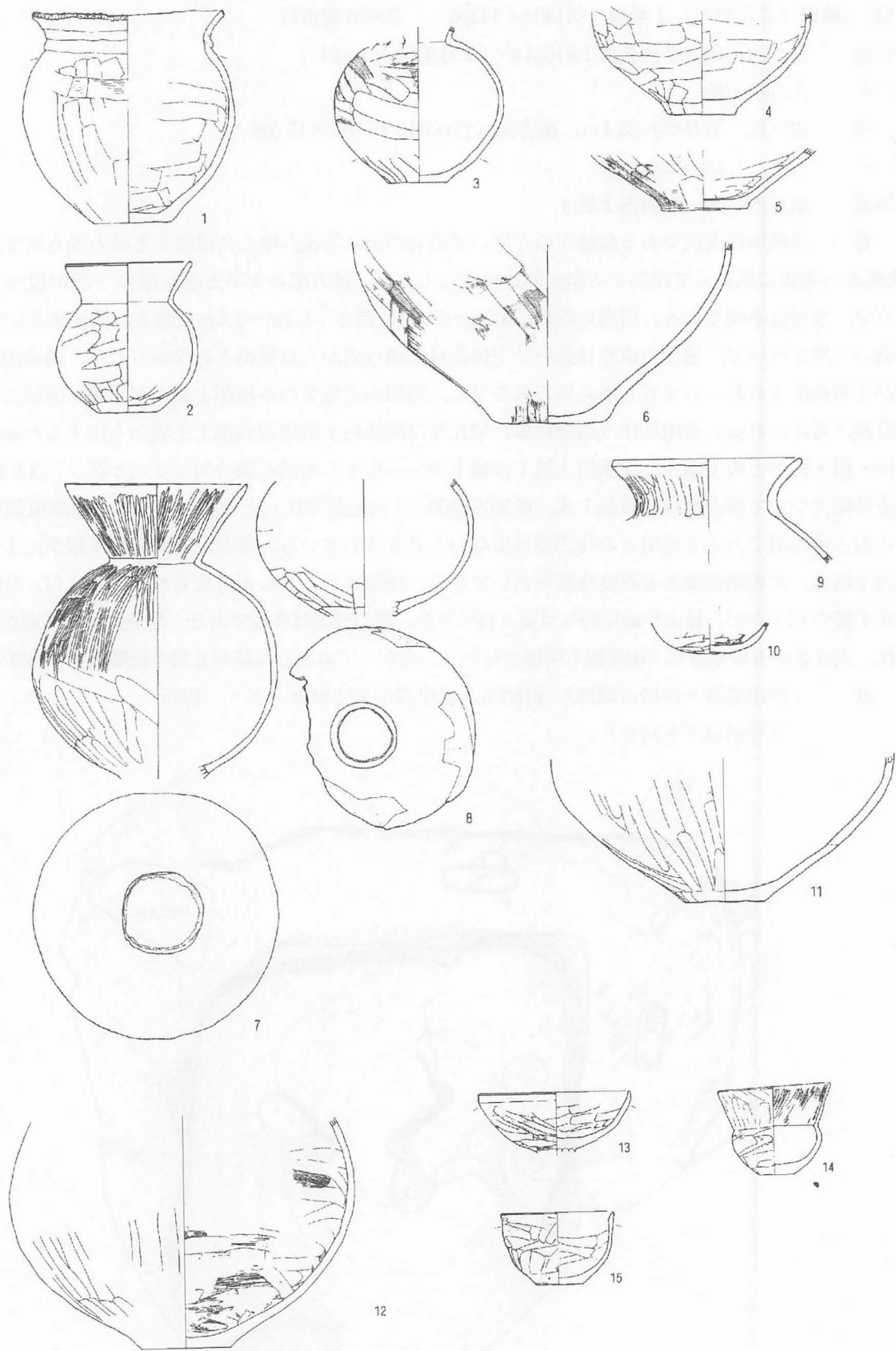
- ①所在地 袖ヶ浦市蔵波字西久保上616ほか（2号墳以下も同じ）
 ②墳形 前方後方墳
 ③規模 墳丘長（遺存部）23.1m，後方部（台状部）16.9m～17.5m
 ④墳丘 有り，1.4m～3.6m
 ⑤主体部 墳丘内不明，周溝内土坑4
 ⑥概要 小櫃川の支流である蔵波川の左岸の標高約37mの舌状台地上に位置する前方後方墳である。

東側から西側に向かって傾斜する斜面部に位置しており，後方部の大半と前方部の一部が検出されたのみで，全容は不明である。周溝の幅は，5.2m～7.8m，深さは1.2m～1.5mを測る。攪乱が著しいため，西側の一部を除いて，墳丘の遺存は悪い。主体部は，墳丘内からは検出されなかったが，周溝内から土坑が4基検出された。いずれも隅丸長方形を呈し，周溝内土坑2のみ棺部と掘方が明瞭に区別でき，木棺直葬と考えられる。古墳に伴う遺物には，墳丘及び周溝内土坑周辺の覆土上層から出土した壺・甕・高杯・埴・椀などの土器と，周溝内土坑1の覆土中から出土した滑石製の勾玉2点と管玉7点とがある。築造時期について報告者は「五領1式，前期古段階，4世紀前半代」としている。また，南東側に位置する前方後円墳である2号墳との時間差は少ないと考えられている。なお，滑石製の玉類が出土した周溝内土坑は，古墳築造後ある程度時間をおいてから，構築されたものと考えられている。(1)の輪積痕を残す甕や(7)の単口縁壺が編年的な目安と言えるが，単口縁壺は多様であり，埴や甕との区別が難しい形状，大きさのものもあり，編年観も明確でない。したがっておおむね草刈Ⅱ期の範疇としておきたい。

- ⑦文献 『神田遺跡・神田古墳群』 財団法人君津郡市文化財センター 1995
 （2号墳以下も同じ）

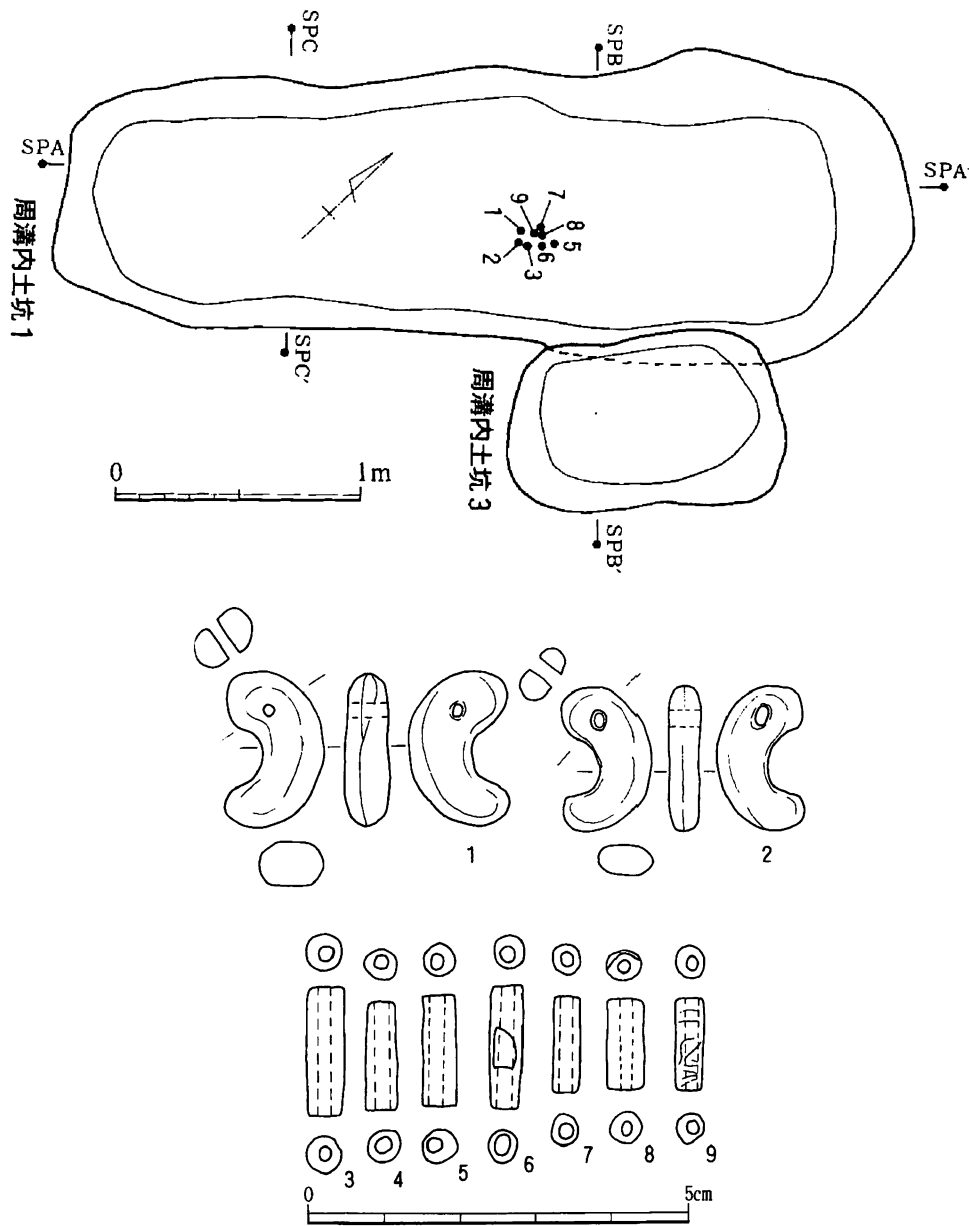


第140図 神田1号墳平面図

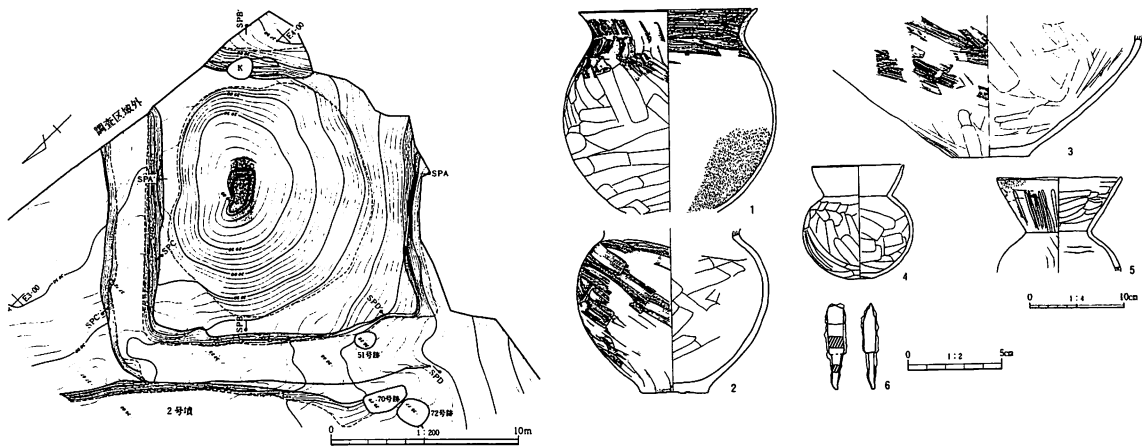


1号墳出土遺物

第141図 神田1号墳出土遺物図(1)



1号墳周溝内土坑実測図および出土遺物



第142図 神田1号墳主体部図，出土遺物図(2)，3号墳平面図，出土遺物図

55-(2) 神田3号墳(第142図) 草刈Ⅱ期(後半)併行

②墳形 方墳

③規模 南東から北西13.5m, 北東から南西13m(外径)

④墳丘 有り, 1.1m

⑤主体部 土坑

⑥概要 主体部からの遺物は無く, 周溝から土器が出土している。2号墳より新しいことは遺構の複合関係で明らかである。土器型式も4の埴は新相である。ノミ形鉄鍬(ノミ頭?)は類例に乏しい。前方後方墳の築造後に, これに取り付くように方墳が造られる状況は, 佐倉市飯合作遺跡でも見られ, さらにその周囲に方形周溝墓が存在することも共通している。

55-(3) 神田2号墳(第143, 144図) 草刈Ⅱ期併行

②墳形 前方後方墳

③規模 墳丘長(遺存部) 21.5m

④墳丘 有り, 1.5m~3.1m

⑤主体部 墳丘内不明, 周溝内土壇1

⑥概要 東側から西側に向かって緩やかに傾斜する斜面部に位置している。南東側周溝の一部は, 3号墳周溝に切られている。前方部は明確に検出できなかったが, 周溝の形状から, 28.6mほどの墳丘長が推定できる。周溝の幅は, 4m~6m, 深さは0.5m~1mを測る。墳丘は中世墓地群により削平されており, 遺存は悪い。主体部は, 墳丘内からは検出されなかったが, 北東側周溝内から土壇が1基検出された。隅丸長方形を呈し, 棺部と掘方が明瞭に区別でき, 木棺直葬と考えられる。古墳に伴う遺物には, 周溝内土壇周辺の周溝覆土から出土したS字状口縁台付甕・壺・甕・碗などの土器がある。築造時期については, 「五領Ⅰ式古段階」という表現をされているが, S字状口縁台付甕(赤塚分類C類古段階=廻間Ⅲ式1・2段階)との時間差が認められる。1号墳出土土器を含め, どのような基準で「五領Ⅰ式古段階」なのか不明であるが, S字甕を含め概ね草刈Ⅱ期の範疇に入ると思われる。

55-(4) 神田1号方形周溝墓(第145, 146図) 草刈Ⅱ期併行

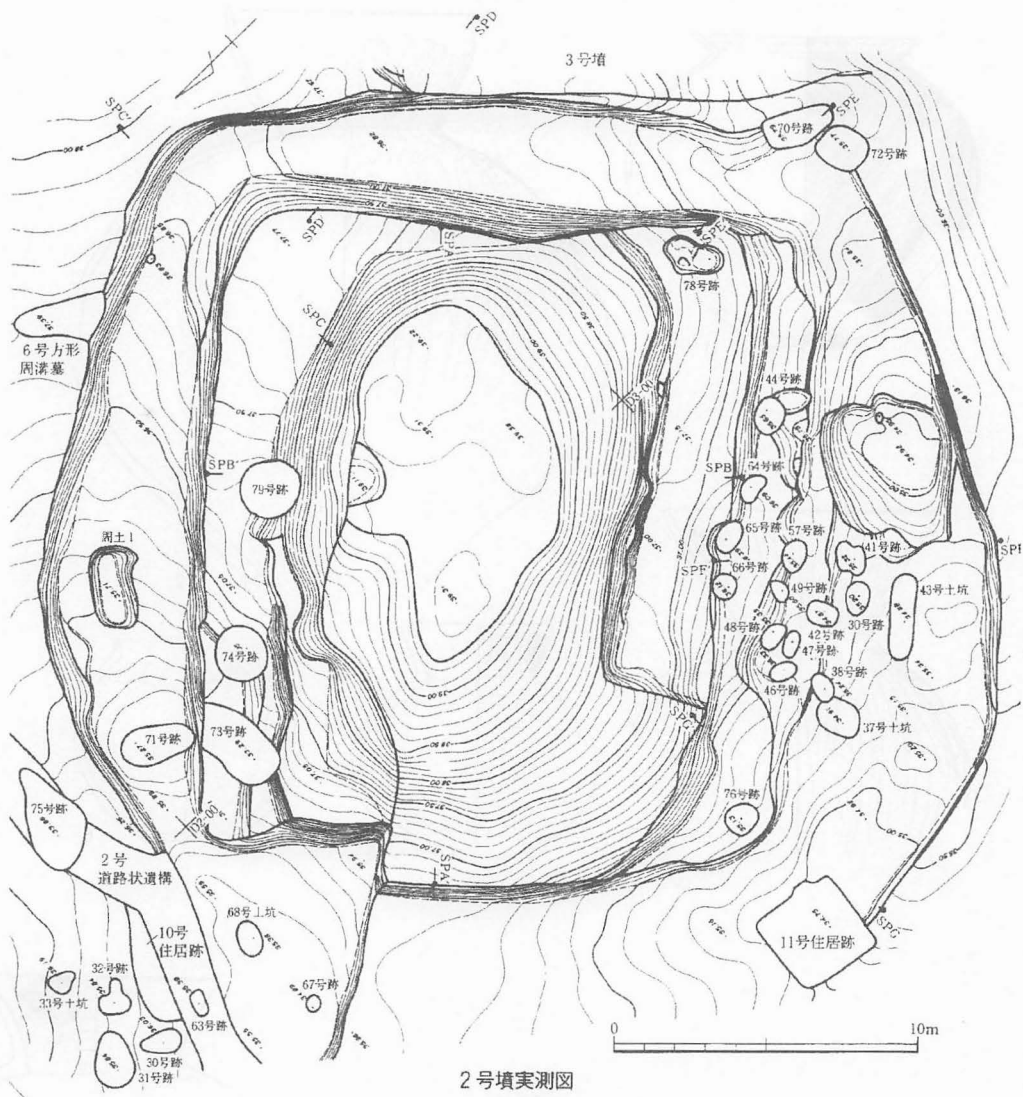
②墳形 方墳(報告では方形周溝墓)

③規模 9.05m×9.00m(方台部)

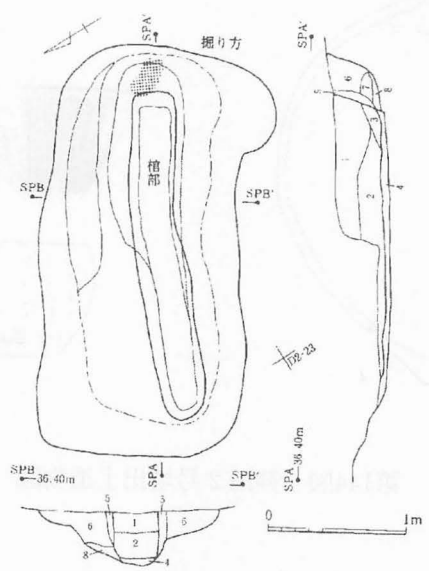
④墳丘 無し

⑤主体部 不明

⑥概要 報告では弥生時代に属されているが, 出土土器は草刈Ⅱ期に比定され, さらに古墳時代に属する9号住居跡を切っており, 明らかに古墳時代の所産である。3号墳より一回り小形であるが, ほぼ同時期に築造されていたと考えたい。本遺構以外にも方形周溝墓と報告されたものもあるが, それらは周溝も細く規模も明らかに貧弱であり, 時期的にも弥生時代に遡る可能性が高い。そうした意味でも本遺構を古墳と捉えるべきであろう。出土土器は単口縁, 胴部球体のヘラなどで甕を主体としており, 草刈Ⅱ期の範疇にあてはまる。

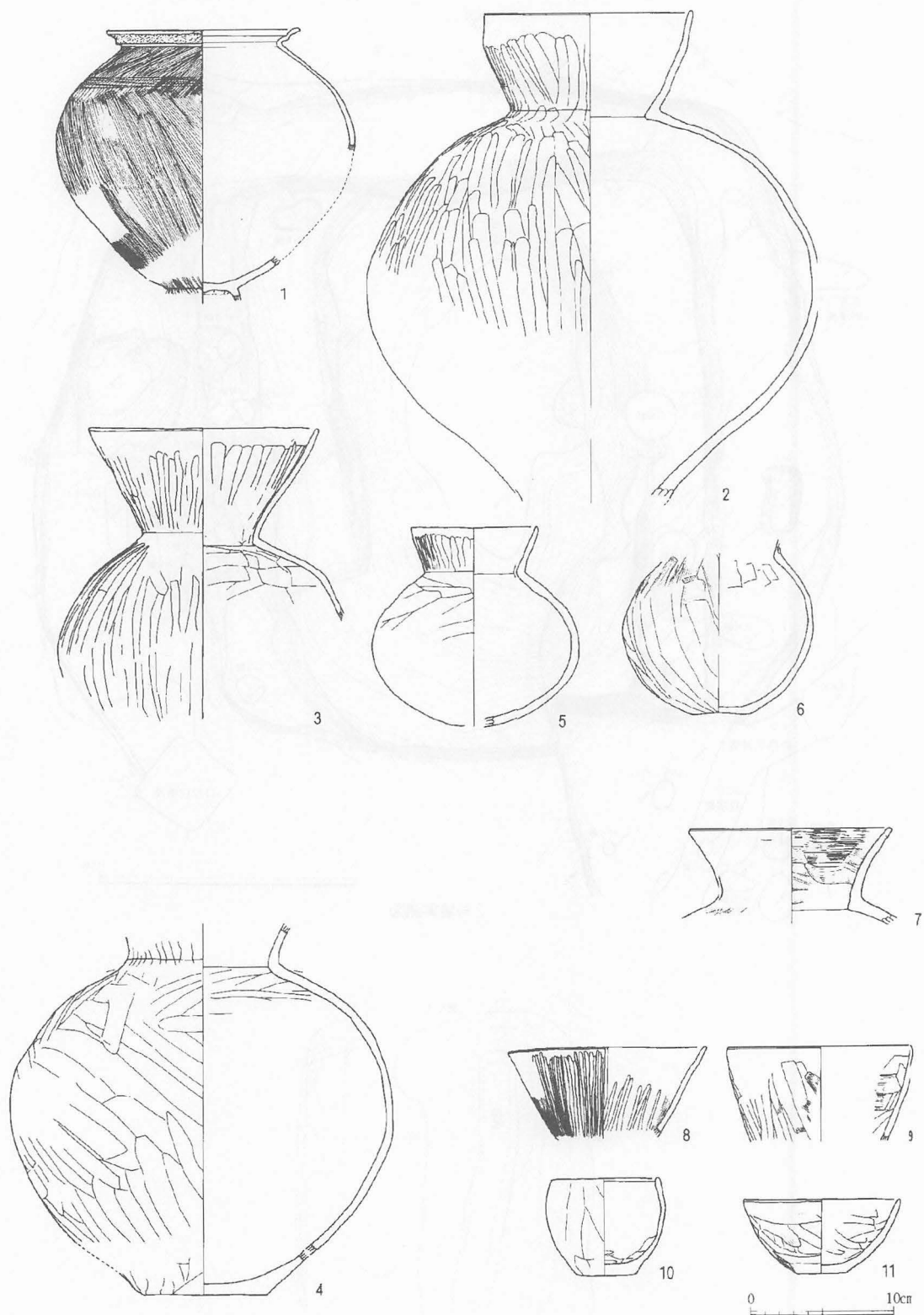


2号墳実測図

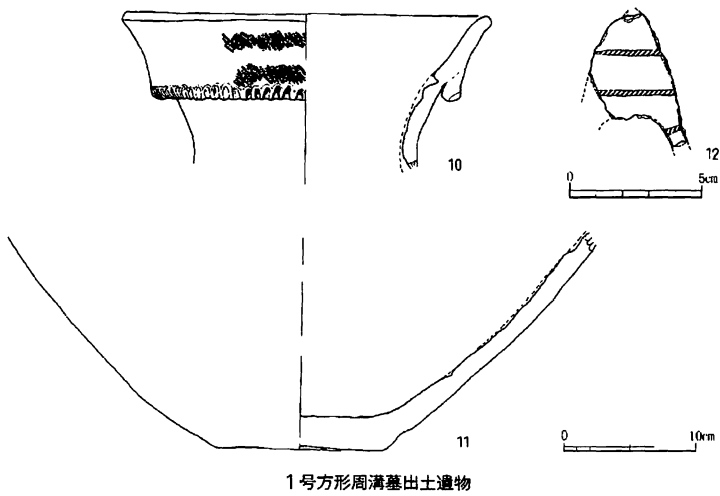
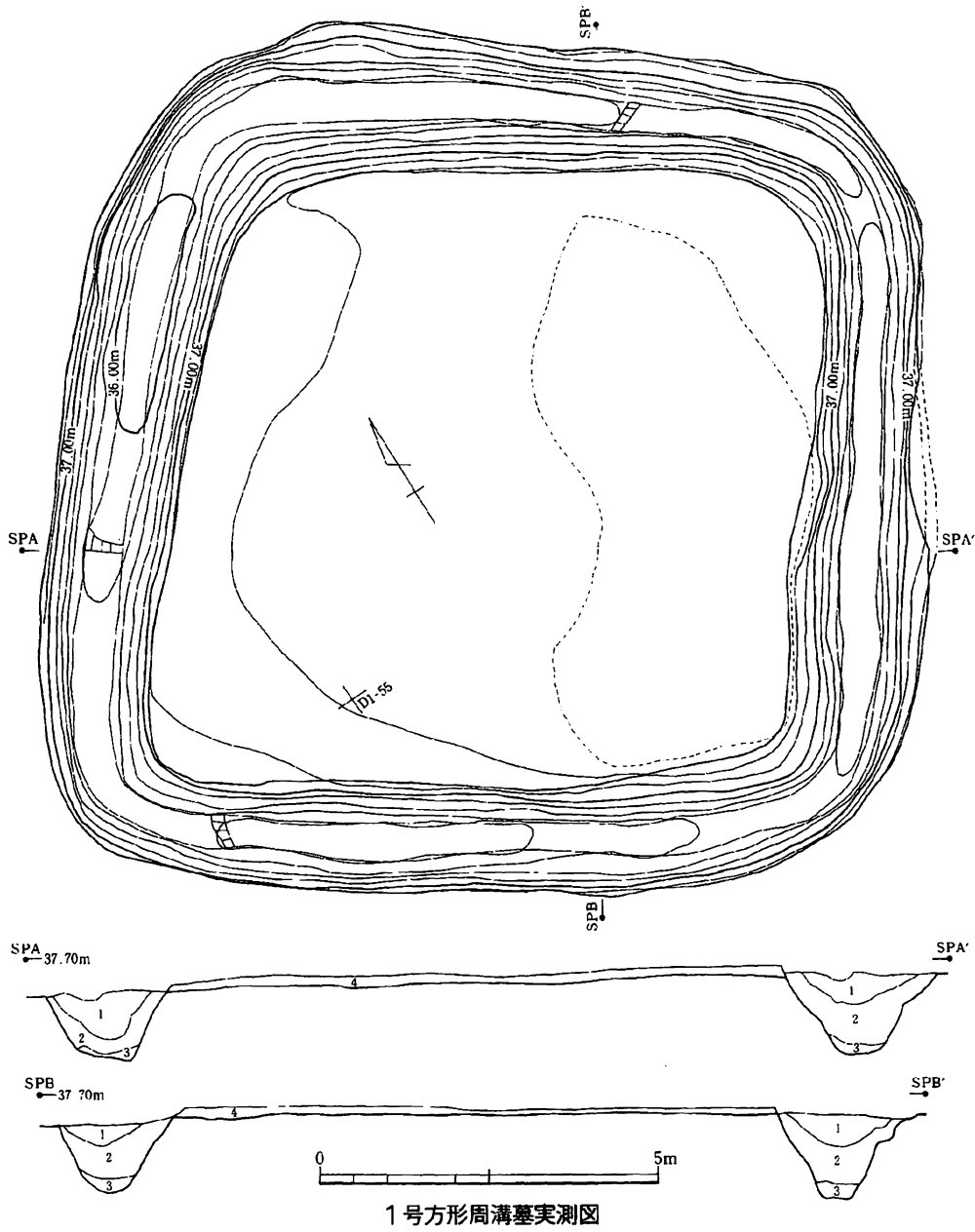


2号墳周溝内土坑1実測図

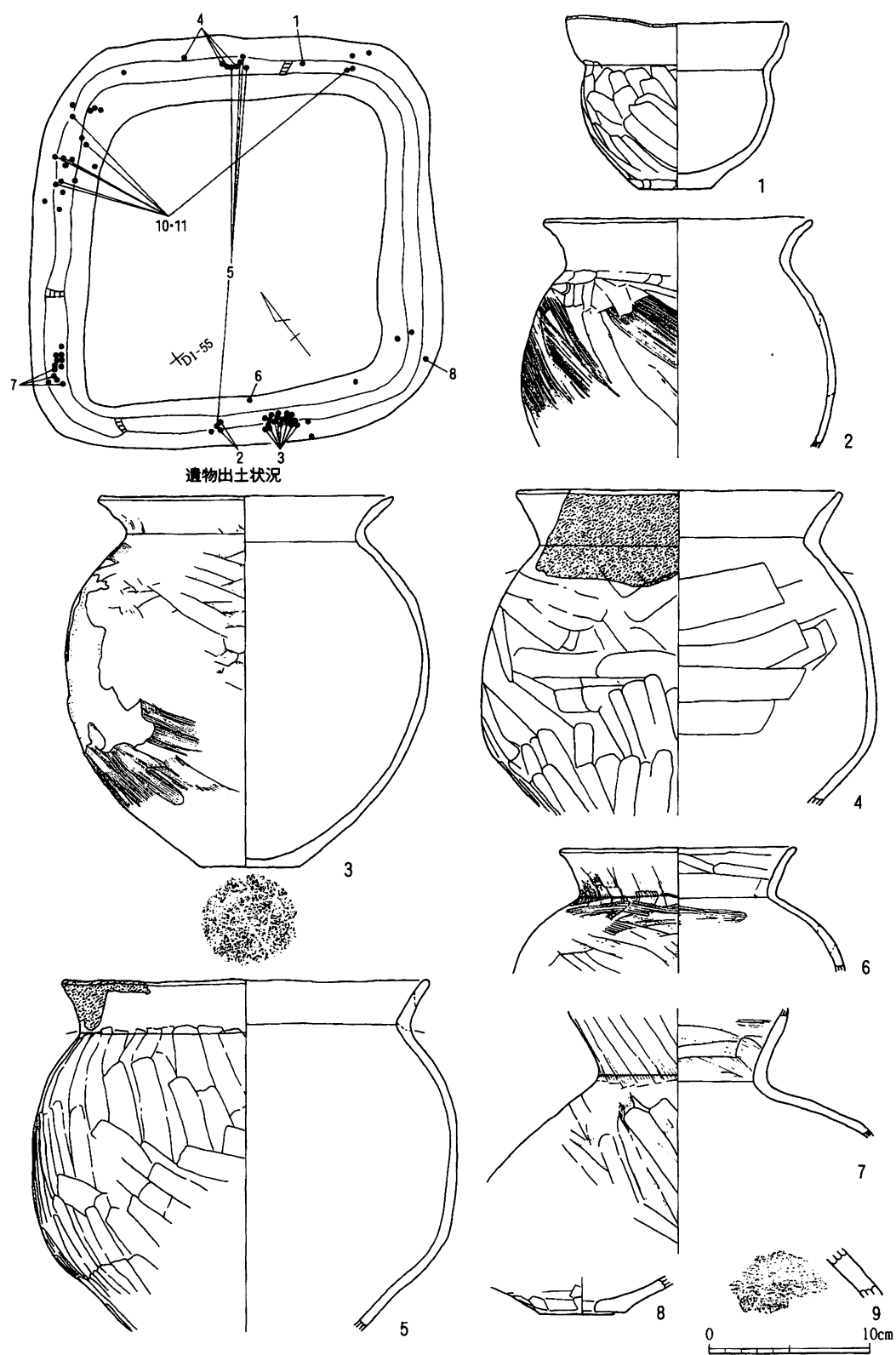
第143図 神田2号墳平面図，主体部図



第144図 神田2号墳出土遺物図



第145図 神田1号平・断面図



1号方形周溝墓出土遺物

第146図 神田1号出土遺物図